
めだかボックス ～From despair to hope ～

じーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めだかボックス From despair to hope
}

【Nコード】

N8354X

【作者名】

じーく

【あらすじ】

少年は幸福だった・・・

幸せで・・・毎日が光で満ちていた。

だが・・・それは一瞬で奪われた・・・

心を一気にへし折られたんだ。

もう・・・彼には何も残らないのか・・・？

絶望だけが彼の心を支配する・・・

- ・ そんな苦痛な毎日だったが・・・ある時真っ白な空間で目覚めて・・・

Prologue (前書き)

好きな漫画の1つです・・・
ちょこつと書いてみたら・・・

結構創作意欲が出てしまいました・・・
他の作品もこの作品もガンバリマスので 暖かい目をお願いします
苦笑

P r o l o g u e

僕は・・・好きだった女性がいた・・・

幼いころから知っていて・・・共に遊び笑い涙を流し・・・
何をするのにも一緒だった。

それは歳をとっても変わらないものだった。

そして・・・僕たちは・・・幼馴染の関係から恋人になったんだ・
・

家族はみんな「やっぱりな!」とか「おそーい!」とか言って冷やかしてはいたが、

とても暖かい目で見ていてくれた。

こんなに幸せな事ってあるのだろうか・・・? あっていいのだろうか?

そこまで考えてしまつほどに・・・ 幸せだったんだ・・・

そんな日にはもう・・・

二度と戻れない・・・・・・・・・・・・・・・・

They are all the beginnings for
om here・・・・・・
《ここから 全ては始まつた・・・・》

「ん・・・・・・・・ここは・・・・？」

目が覚めると・・・ ここは何も無い空間。

唯・・・ 言葉で表現すると、真っ白で何も無い空間。

地面があるのかも分からない、実際に立っているのかも分からない。

「あ．．．あれ？体が．．．」

自分の姿が．．． 無いのだ。

「よう．．．」

そこへ．．． 1人の男が近付いてきた。

「．．．．．だれ？」

慌てるわけでもなく．．． 警戒するわけでもない。

唯．．． 乾いた言葉で話す。

もう何の感情も籠っていない。

全てどうでもいいかの様な．．．

そんな声だ。

「．．．なるほどなあ．．． お前．．．ンな事があつたのか．．．
そりゃあ 心の1つや2つ壊れちまっても不思議じゃないな人間
つてのは脆いからな．．．」

目を見ただけで・・・その男は全てを理解したようだ・・・

「だからなんなの？ 君は・・・誰？ それにここは？」

気になるセリフはあった・・・「人間つてのは脆い」・・・だ。

だが・・・一瞬だけ考えたが、直ぐに考えるのを止め、いつもの表情に戻る。

「お前みたいな人間・・・オレは沢山見てきた。大体は同じなんだけどな・・・違うところがある。人は・・・死んじまったら・・・その魂は浄化され・・・全て忘れるんだ。だが・・・お前さんは・・・死しても尚・・・覚えてるんだな。」

ああ・・・やっぱりそうか、

男の話を聞き、理解した。

《僕は死んだのだと・・・》

「理解したようだな・・・」

また目を見て感じ取ったのか、男はそう呟いた。

「はい・・・もうどうでもいいです。僕を・・・早く連れて行ってください・・・もう何も・・・残ってませんから・・・」

そう呟いた。

男は本当に・・・心の底からそう言っていると感じていた。

「・・・ふふふ オレはおまえに興味が湧いたぜえ。」

男からは意外な言葉が帰ってくる。

「興味・・・？」

「そう・・・興味・・・だ。変な意味じゃないぜ。さっきも言ったが、ここに来る奴らはほぼ全員・・・記憶なんか全部消えている。当然だ。ここは所謂体と魂が離れ・・・浄化されたものがここにくるんだ。だが、お前さんは魂となっても・・・その深い悲しみを忘れていない・・・忘れられてない。異常なまてにな。」

ということらしい・・・

僕は結局何が言いたいのがよく分からなかった。

その次に出てきた言葉に更に驚いた。

「お前・・・もう一度・・・違う人生を歩んでみないか？」

所謂・・・生まれ変わりという奴だろう・・・か？

「いえ・・・僕は疲れきってます・・・生まれ変わらなくてもいいんです。・・・このまま消えてい来たいんです・・・」

その提案を拒否した。

すると

「今のお前は絶望のどん底だろ？」

また脈絡もあまり無い話が始まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして・・・ 生きたいと思えない・・・なぜなら 絶望だから。魂が歪んでえしまうほどに・・・」

回答を聞く前に・・・男は続けた。

「そんなお前に凶報だ・・・ お前はそのままだと悠久の時・・・ 早い話このままだと、これから永遠にその苦悩を味わう事になる」

ピクン！！

その言葉に強く反応した・・・

この苦しみが永遠に・・・？

信じられないといった感じだ。

「信じられないと思うが、間違いない。それが証拠に・・・見ろ。」

そう言つて男が手を翳した先を見てみると・・・

それは・・・見たことあるような・・・無いような・・・そんなとても・・・デカイ町だ。

「これは・・・？」

見たことあるような気がするけど・・・

疑問だった。

疑問に思ふことなど・・・何かかなり久しぶりのような気がする・・・

「見たことある・・・よな？ 当然だ。ここはお前が暮らしていた場所。ただ・・・100年後になるがな・・・」

「ひゃっ・・・100年・・・？」

「ああそつだ・・・ほら、町の空に日付がふつてあるだろう？どんな技術かは興味ないんで知らんが、日付が2114年になってんだろ？」

男が指した方を凝視する・・・

間違いない・・・日付は大体100年後だ。

仕掛けにしては凄すぎる。

自分の体が見えないのにこの場にいる変な感覚もそつだし、

トリックで出来る事ではなかった。

「信じるか・・・？いや信じざるをえないだろうな。そう・・・お前さんが死んでもう100年になる。それでも・・・お前は記憶を保持しているそれも鮮明にな。」

確かにそうだった。

あの・・・大切なものを失った痛みは・・・まだ心にズキリツツと傷を抉るように健在だ、

「時と共に風化する・・・なんて次元じゃねえんだお前の場合。だからお前に興味を持ったんだよ。人に興味を持つなんて、何千年ぶりかなあ・・・？」

途方もない事を言っている・・・

何千年って・・・

「こんな苦痛ずっと受けるなんて・・・嫌じゃねえか？お前さんもさ。」

そう言い再び近付いてきた。

「・・・・・・・・・・」

沈黙・・・

「今回は迷ってんな。」

この人に隠し事は無理なんだろう。

確かに僕は迷っている。

迷うなんて・・・凄く久しぶりのような気がする。

「1つ・・・教えてください。」

聞きたい事があつたんだ。

「ん？なんだ？」

「唯の興味本位名だけで・・・貴方は僕にこんなに気にかけてくれているんですか？他に理由は無いんですか？」

確かにもつともな疑問だ。

唯のお人よしって感じはしない。

「まあ そう感じても無理ねえな・・・ まあマジで興味が湧いたつてのはマジなんだ、そして・・・もう1つ」

そう言つて男は穏やかな顔になる。

「さつき何千年ぶりかと言つたけどあれは実は嘘・・・だったな 実はお前さんより早めに来たお嬢さんが、お前のことを頼むつて言つててさ。」

ドクンッ・・・

心臓などもう無いはずなのに・・・胸が高鳴つたような感覚がした。

「私は大丈夫だから・・・貴方に生きている間に幸せをたくさん貰つたからって・・・でも・・・お前の性格を完全に知り尽くしているからかな・・・ お前がここまで追い詰められるのも読めてた

みたいなんだわ。全く・・・こんな人間にほとんど同時に2人にあえるとはな・・・」

オレにとつたら100年なんてあつという間だ、

転寝したら・・・100年たつてたなんてざらだし。

「・・・か・・・かのじよが・・・？」

涙なんかでないはずなのに・・・泣いている感覚が今度はしていた。

「そうだ・・・お前がここでこれ以上しょげていると彼女・・・うばれないみたいなんだわ。お前さんの心の傷を完全に癒して・・・もう一回天寿を全うしないと、今のような魂の牢獄に閉じ込められたまんまになるんだぜ。そんなのは嫌だろ？」

・・・

「まあ　そういうことだ。生まれ変わらしてやることはできないが・・・別の二次元へ転生してやる事はできるんだわ。そっちら何とかな・・・実在しない思いの世界だから干渉しやすいんだ。」

二次元・・・世界・・・か・・・

「彼女が好きだった世界にじげんが合ったよな・・・確か。」

何かを思い出していた。

「・・・たしか・・・あれは【めだかボックス】だった・・・正

しすぎる主人公に惹かれて・・・何度も一緒に・・・立ち読みしたり・・・してたっけ・・・」

昔を思い出すように・・・そう呟いた。

どこことなく・・・彼女と主人公は似てたんだよなあ・・・

決して折れない心とか・・・人望があったりとか・・・正しすぎるような感じもさ・・・さすがに漫画的なパラメーターはないけど。

「・・・そいつで決定でいいか？」

また・・・心読まれちゃった。

「うん・・・彼女との・・・思い出の漫画だからね・・・今の僕は・・・まだ立ち直れそうにない・・・１人でずっといたって絶対に考え込んで・・・どうでもいいって気持ちになってくる・・・なら・・・彼女が・・・会えなくてもそう言ってくれてたのなら・・・もう一度・・・頑張ってみるよ。僕」

力強く・・・頷いた。

先ほどまでとは・・・比べ物にならないほど・・・生氣は戻っている感じた。死者なのにそんな感じがする・・・

「へへ・・・見違えるほどになったじゃねえか。さっきと比べてな。よしそっちでもう一回頑張ってみな。まあ破天荒で無茶苦茶な登場人物に振り回されるかもしれんがな。頑張ってきていよ。」

そう言つと・・・

白い空間が一面光りだした。

「うわぁ・・・なんかキレイだね・・・ あ、そう言えば」

男は思い出したように・・・

話す。

「あの世界は 確か 異能・・・ アブノーマル 異常とか過負荷とか マイナス・・・ 後・
・・・ なんだっけ？ まあいいや・・・そんなのがあったと思うん
だけど・・・ そんな能力者みたいなのになつたりするの？ 僕も」

男は手を掲げながら言う。

「ああ・・・ ああいう世界はそいつの環境やら性質で能力を持つ
みたいなんだわ。詳しい事は分からないが、間違いないとお前さんは
スキル・ホルダー 能力保持者になつてゐるだろう。後、今は見る影も無くなつてゐるお前
さんの身体能力だけど、思いの強さで強くも弱くもなるようになって
ゐるからな、 しっかり頑張れよ！」

なるほど・・・ 思いの強さか・・・

「確かに今じゃ見る影もないはずだよね・・・ 想つてた大切な人
を失つちやつたんだからさ。」

苦笑する・・・

でも 以前ほど落ち込んではいないみたいだ。

「ははは・・・彼女の言葉本当にお前には効果抜群だったんだな・・・そろそろか」

男は見上げると……そう呟く。

「時間だ……じゃあまたな……また会おう。」

• • • • •

$$\begin{array}{ccccccc} \text{H} & \text{H} & \text{H} & \text{H} & \text{H} & \text{H} & \text{H} \\ | & | & | & | & | & | & | \\ \text{C} & \text{C} & \text{C} & \text{C} & \text{C} & \text{C} & \text{C} \\ | & | & | & | & | & | & | \\ \text{H} & \text{H} & \text{H} & \text{H} & \text{H} & \text{H} & \text{H} \end{array}$$

空が・・・白い空が開いた。

「ツツ!!」

そこに吸い込まれる！？

「ああ！！まって最後に1つ！」

吸い込まれる直前に聞く。

「あなたの名前はなんですか？」

「オレか？俺の名は……」

[illegible]

そして・・・世界は光に包まれた・・・

Prologue (後書き)

ちよつと長くなっちゃいましたね・・・
とりあえず・・・

読んでくれた方！ありがとうございます！！

さあ！幸せになるぞ〜 ♪ 苦笑

第1箱 「犬や猫じゃないんだからさあ・・・」 (前書き)

よろしく願いします!!

第1箱 「犬や猫じゃないんだからさあ・・・」

あれ・・・・・・

ここは？

「さっきの人は・・・？ いない・・・」

辺りを見渡しても・・・いなかった。

それにさっきの場所と違って、なんだか現実味があるところに来た
って感じた。

体もちゃんとある・・・

「転生？そっか・・・転生したんだ・・・僕・・・あっという間だったな・・・」

そう理解し、改めて周りを確認する。

そこは・・・なにやら狭い箱の中・・・

触ってみると・・・

「これってダンボール箱？」

そうダンボール箱の中だ。

たしかに【めだかボックス】って名前だったけど・・・

ダンボールかあ・・・

っと考えていたら・・・

一枚の紙が置かれていたことに気付いた。

《名前は劉一です。可愛がってあげてください・・・》

の一言・・・

「犬や猫じゃないんだから・・・それに・・・僕・・・スッゴい小さくなってる」

あきれてしまっていた。

それに、まさかこんなに若返るとは・・・ まあまだ10代だったけどね・・・

体が小さいといろいろと不憫な事がありそうだなあ・・・

でも、

「もっと大きな不幸を背負っていたし・・・ 何とも思わないや、これくらいじゃ・・・」

シヨックな事などない。

うん・・・普通だ。

まあ それがこの世界で言う・・・ 《異常》とも取れるのだろうけど。

そして。

記憶を・・・懸命に辿ってみると、

記憶が段々と脳裏に浮かび上がってきた。

ちゃんと、この世界の住人として転生できているようだ。

どうやら生みの親は、僕の異常さに気付いて恐ろしくなり捨てたと
言う事だろう。

人は理解できない者に恐怖する・・・

それは、親とて例外ではなかった。

生まれてきて・・・

教えてもない事を知っている・身体能力が異常に高い。

初めは天才と喜んでいたが・・・それが徐々に恐怖に変わって行っ
たのだろう。

冷静に分析できる・・・

「これが僕の異常性・・・なのかな？ 瞬時に全て理解できる事・・・
・・・？ 記憶力とか・・・？ んー・・・わかんないな・・・」

こちらではあるのか分からないが・・・

サヴァン症候群に類するものなのかな？と思った・・・

「まあ・・・いいや・・・考えていても分からないしね・・・」

そう言つと考えるのをやめた。

幸いな事に気温は低い気がするが、雨は降っていない。

そのため、

暫くその【ボックス】の中でじつと座っていた。

そして。

数十分後・・・

人が声を掛けてきた。

「あれ！！何これ！！！！ ええ！！子供が・・・ 男のコが・・・
！！」

女のコだ。

女のコが僕と同じくらいのコと手を繋いでいた。

兄弟かな？

「ちょっと！！！！ 僕！どうしたの？」

慌てたように聞いてきた。

「僕は・・・捨てられたみたいなんです。」

涙を流すわけでもなく、淡々とした表情で答えた。

その事に少なからず動揺したみたいだ。

捨てられた事をしっかりと理解しているのにこの表情・・・

2、3歳のコが・・・

これは放っておけないわね・・・

「そ・・・そつか・・・ よっし！ 君！私たちと一緒に来なさい！
！ こんなところにいると風邪を引いちゃうしね。」

そう言うところ・・・手を差し出された。

少し戸惑ったが・・・

手を握った。

ギュッ・・・

暖かい手だ・・・

ずっと・・・この温もりを・・・忘れていたような気がする。

人の温もりを。

すると、自然と涙が零れ落ちていた。

表情はそのままなのだが・・・

握ってくれた女の口はちょっと驚いていたが、

直ぐに笑顔に戻った。

「・・・よし！すぐそこが私が勤めている病院よ。もうちょっとでつくからね。」

そして軽く涙を拭ってもらった。

「後この口は善吉って言うんだ。仲良くしてあげてね。」

ぜん・・・きち・・・？

そうか・・・この口が、

「うん。よろしくね。善吉くん 僕の名前は劉一だよ。」

そう言って手を差し出す・・・

「うん！！よろしくね！りゅうくん！」

迷いなく握ってくれた。

そして・・・この世界に入って彼が・・・

最初の・・・

友達になっ
たんだ。

第1箱 「犬や猫じゃないんだからさあ・・・」 (後書き)

ありがとうございました!!

もちろんこれは原作で言う13年前・・・のつもりです! 苦笑

さあ・・・これから例の病院へ人体実験に・・・

とはならないと思いますが・・・

某女のコとか男のコとか・・・
遭遇率99・9999999・・・%だと言う事で・・・苦笑

失礼しましたー!
では!

第2箱 「プラスとマイナスの間の僕は・・・ゼロ？」（前書き）

よろしくお願いします!!

さあ・・・例の子ども達にあっちゃいます。

遭遇率100%でした・・・ 苦笑

第2箱 「プラスとマイナスの間の僕は・・・ゼロ？」

暫く歩いていくと、

かなり大きめの病院が見えてきた・・・

んゝ 総合病院かな？？

「さあ！ここよ！私が勤めている病院！」

そう言い、病院の中へ入った。

本当に・・・心療外科医なんだね・・・

見た目幼い姿なのに・・・僕もそうだけども・・・

そうしているうちに、託児室が見えてきた。

「さあーで、私はこれから仕事があるからさ！ 善吉ちゃんはこの
で遊んでいてね！」

瞳さんはそう言った。

実を言つと・・・この人が善吉君の母親らしい・・・

下手をすると僕と同じくらいの体格に近いのに・・・正直な感想です。

「つてあれ？　僕は？？」

善吉ちゃんはどうってことは？

「ああ！りゅういちくんはちょっとだけ一緒に来てくれるかしら？」

瞳さんが笑いながらそう言う。

善吉は寂しそうにしていたが。

直ぐに戻ってくるよと、伝えると嬉しそうに頷いて戻ってくるまで
遊具のパズルをして遊んでる！っと言ひ部屋へ入った。

「さあ！いきましょ！」

そう言つと再び手を繋ぎ、託児室を後にした。

「あー！　そうだ・・・この時間も他に患者がいたんだ・・・」

瞳さんはしまった！ツといった表情でこちらを見る。

「あ！大丈夫ですよ！　僕、待ってます。　だから割り込みとかなんてしませんので　他の患者さんを優先させてください。」

表情を読み取ったようにそう答えた。

「そつ・・・そう！　ゴメンね！！直ぐに済むからね。」

瞳は・・・彼の異常性に驚きながらも直ぐに笑顔に戻り診察室へと向かった。

瞳　s i d e

「彼・・・いや　本当に2歳児なのかな・・・？　私が言うのもなん

「ただど……」

自分の容姿もねえ……

って考えていた 苦笑

でも2歳児とは思えない程……

しっかりといろんなことを理解している……

万能タイプの異常能力かしら……??

暫く考えていたが……

「まあ…… 彼の事もだけど今はそれどころじゃないもんね。」

そつ…… ここは異常と呼ばれる人たちが集まる病院……

言い方は悪いが……あまり1人の事だけを考えて入られないのだ。

だが……

「いよっし！ 今日もがんばっちゃおう！」

ぐつと力を入れた。

彼女は・・・1人1人に真剣に向き合っている。

当然という人もいるだろうが。

異常性をもった子供に真剣に向き合う事は生易しい事ではないのだ・
・

彼女も異常といわれていた子供の1人だった故も・・・あるのかも
しれない・・・

s i d e o u t

イスに座り・・・

前をじつと見て・・・

全く姿勢を崩さずに劉一は順番を待っていた。そこに・・・

1人の子供が近付いてきた・・・

女のコだった。

「おい！ 隣はあいておるか？」

初対面だったのだがそんなことは関係ない！といった感じだった。

「うん！大丈夫。僕1人だったから、いいよ。」

「そうか すまないな。」

彼女は笑顔を見せ座った。

「凄く・・・嬉しそうだね 君。」

女のこの顔が笑顔（わくわくした感じかな？）だった為 好奇心から話しかけていた。

「む！顔に出ていたか そうなのだ。もしかしたら自分が分からなかった事を教えてくれるかもしれないな。それでちょっぴりわくわくしていたんだ。」

「そうなんだ。」

なんだか・・・彼女の笑顔は素敵だと思った・・・

率直な感想なんだけど。

理由はよく分からなかったけど・・・

彼女と・・・話していると・・・

1つ隣にいた男の子が近付いてきた。

「『まったく』 、『なんのためだなんて』 、『みんな大人の癖に』 、『
的外れだよねえ』」

男の口はそう言うところ・・・僕と女の口の前に立った。

「『人間は無意味に生まれて』 、『無関係に生きて』 、『無価値に死ぬ
のに決まってるのにさ』 、『君達もそう思うだろう?』 、『えーと
めだかちゃんにりゅーいちゃん?』」

そう彼が言つと・・・

めだかは 楽しそうな表情から一変した。

「・・・・」

僕は黙っていた。

多分・・・ちよつと前までの僕なら賛同していたかもしれない。

「『あれ・・・?君はそう思わないのかい?』 、『絶望しているよう
に見えたけど?』」

くまがわ みそぎ・・・

彼の名札にはそう書かれていた。

「そうだね・・・多分ちよつと前の僕なら・・・君の考え方に賛同
したと思うよ。」

そう言う。

「『ってことは・・・今は違うんだね？』」

「うん。」

そう言うときみそぎは笑った。

「『うーん ちよつと遅かったんだね。僕は』 『もうちよつと早く君に合いたかったよ』 『でも、めだかちゃんは・・・？君もいつぱい人を終わらせてきたんだよね？』 『彼は残念だけど君はそれでいいと思うよ。』 『何をしてもいいんだ。』」

そう言うとき・・・

「球磨川くーん 五番検査室に入ってくれる？」

ナースのお姉さんから呼び出しが合った。

「『だって 世界には目標なんてなくて・・・人生には目的なんてないんだから』 『後りゅういちくん、僕に賛同できるのだったら』 『いつでも待ってるよ』 『じゃあまたね。』」

そう言うとき彼は大きなぬいぐるみと共に、

検査室へと入っていった。

「君・・・大丈夫かい？」

めだかはまだ考え事をしているのか表情は硬く・・・何も言わなか

った。

恐らくは聞えていないのだろう。

自分にも・・・闇がある・・・

その耐性があるからこそ 彼の話をそのまま聞けたのであろう。

常人なら・・・いや常人じゃなくても・・・彼のマイナス面を受け
たなら、心から動揺してしまうだろう。

いや・・・めだかの場合は・・・動揺というよりは・・・

彼の意見・・・を正しいと思ってしまったのだろう・・・

次に彼女も呼ばれ・・・

そのまま会話の1つもなく・・・

姿を消した。

第2箱 「プラスとマイナスの間の僕は・・・ゼロ？」（後書き）

ありがとうございました！

第3箱 「この世に意味は・・・どうなんだろう？・・・けど救われたんだね。」

よろしくお願いします！

めだかボックスに関しては・・・
ちょっと短めに書いてます。

長く作るの特にオリジナル話は難しいですから・・・
でもガンバリマス！！

第3箱 「この世に意味は・・・どうなんだろう？・・・けど救われたんだね。」

そして暫く待ち・・・

「劉一くん！ 三番検査室に入ってくれるかな？」

自分の番が来たようだ。

「はい。わかりました。」

そう言い、検査室へと入っていった。

相手は、瞳先生じゃなかったが、とりあえず。

いろいろと問診をしたりテストをしたり・・・

それは何時間にも及んだ。

疲れてはいないが・・・

「善吉君を待たせちゃったな・・・」

急いで託児室の方へと向かった。

そして中に入ると・・・

善吉は何やら座り込んで考え事をしていた。

「善吉君ゴメンね。遅くなつて」

後ろから声を掛ける。

「あつ！りゅうくん！んーん！大丈夫だよ！」

こつちを向くと笑顔で答えてくれた。

「何をしてるの？」

善吉に近付き問いかけると・・・

「これがどうやっても解けなくてね・・・」

すこし残念そうな顔をする・・・

それは知恵の輪だった。

聊か2歳児には・・・いや幼児向けの知育玩具とはいえないと思つた。

「ああ・・・それは難しそうだね。善吉君は説いてあげたら嬉しい？それとも最後まで自分の力でやり遂げたい？」

およそ幼児に言う幼児の言葉ではなかったが・・・

そう聞いてみた。

「えー！どうやっても解けないんだ！解いてくれた方がうれしいよ！」

善吉は迷わずそう答える。

「そっか、じゃあ貸してごらん。」

そうやって知恵の輪を受け取る。

そして解こうとした時、

テレビに目を向けてしまった。

託児室にはあまり似合わない内容の話した。

それを見ると・・・

カシャン・・・・・・・・

知恵の輪を落としてしまった。

「りゅ・・・りゅくん？どうしたの？？」

驚いて善吉も近付いてくる。

「あ・・・あれ？おかしいね。僕どうしたんだろう・・・」

涙が・・・次々出てきた。

それはテレビの内容のせいだ。

ある幸せの家族が・・・

突然不幸な事故にあい・・・

夫のみを残し、皆他界してしまうと言う・・・

なんでこのような内容の話が流されているのかは理解できない。

幼児には難しすぎる内容だろう。

けど・・・

「りゅうくん！どこか痛いのか？大丈夫なの？？」

善吉も目に涙を浮かべながら心配してくれていた、

「善吉君・・・僕・・・とっても悲しい事があったんだ・・・」

幼児に話すことではない。そして幼児が話すような内容ではない。

明らかに傍から見れば異常だったが、そんなのは関係なく話す。

「大切な・・・ものをなくしちゃってね・・・ もう戻ってこないんだ・・・ もう・・・何もかも・・・終わりのような感じがするん・・・だ・・・」

涙を流していた。

「りゅうくん・・・」

善吉も・・・幼いなりに必死に慰めようとしてくれていた。

「彼がいったこと・・・正しかったのかな・・・？ この世に意味なんてないんだ・・・こんなに悲しいんだ・・・」

そう呟く。

「まってよ！意味なんてないことないさ！」

善吉が叫ぶ。

「え？」

声量に驚いて善吉の方を向く。

「確かに・・・りゅうくんは悲しい事があつたんだよね・・・でも・・・それでも意味ないなんてことないよ！」

そう言い切る。

「なら・・・なんで僕は・・・こんなに悲しい気持ちになるのかな・・・ 苦しい気持ちに・・・」

劉一は・・・顔を俯いた。

「僕は君に会えて嬉しかったよ！！お友達が増えたしね！意味がないなんて事は無いよ！君が・・・辛いのは・・・僕には分からないけど。それは、君はこれからきつと幸せになる為に！今があるんだと思うよ！そうだよ！きつと！きつと！今のことが吹き飛んじやうような幸せが君を待ってるからだよ！」

・・・善吉の明るい・・・無邪気な笑顔は・・・

僕の心を溶かしてくれるようだ・・・

そつと・・・優しく・・・包み込むように・・・

「・・・ありがとう・・・善吉君・・・僕は・・・君と友達になれたことが・・・幸せだよ。」

心からそう思えたのだ。

そして善吉が頭を撫でてくれた。

不思議と・・・心が落ち着くような・・・

そんな感じがしていた。

暫くして

「さー！仕事終わったわ。善吉くん！りゅーくん！帰るよー！」

善吉と遊んでいると・・・

瞳さんが帰ってきた。

「お疲れ様です！」「おかえりー！！！」

善吉と劉一がそれぞれ言う。

「うん！ただいまあー！じゃあ 帰ろつか。」

そう言う・・・そのまま2人と手を繋ぐ。

「え・・・っと 僕は？？」

「ん？りゅーくんも一緒にね。」

笑顔でそう答えた。

その言葉を聞いて善吉は喜ぶ。

でも僕は・・・

「ご迷惑・・・じゃないですか？」

そう答えた。

すると・・・

「こぉーら!」

瞳さんが軽く拳を作り頭を小突いた。

「子どもがなーに遠慮してるのよ!大丈夫!1人になんてさせるわけないでしょ?一緒に帰りましょ?」

そう言う・・・とても優しい笑顔で。

「そーだよ!!りゅーくん!」

善吉も同様に優しい笑顔だった。

「あ・・・ありがとうございま・・・す・・・」

本日・・・

3度目の涙。

涙は嫌なものだと思っていたけれど。

認識を改めよう・・・

そう感じた。

この涙は・・・

そう、

幸せの証なのだと感じた。

その日、3人は善吉 瞳 劉一の順で・・・

仲良く手を繋ぎ帰宅した。

・・・

外から見ると・・・

親子にはみえないだらーな・・・

苦笑

第3箱 「この世に意味は・・・どうなんだろう?・・・けど救われたんだね。

ありがとうございました！

第4箱 「めだかちゃんが始まった」 (前書き)

よろしく願います!!

第4箱 「めだかちゃんが始まった」

劉一は・・・

暫く人吉家にご厄介になっていた。

善吉も友達がお泊りに来た！って感じで喜んでいる。

久しぶりに感じた・・・

家庭というものの暖かさだ・・・。

そして・・・病院の方は指示があつた為 毎日のように通院した。

異常と言うことをストレートには言わないが、

劉一はそのことをしっかりと理解していると感じたのだろう。

しかし、僕の異常性を見ても、年齢的にも暫くは通院した方が良く
と瞳さんが・・・瞳先生が判断したのだろう。

そうとは言わなかったけれど、大体想像がつく。

「病院は別に全然苦じゃないけど・・・同じような検査がどんどん続くのはさすがに嫌気が出てしまうなあ・・・動物じゃないんだし・・・」

そう思っていた。

その日はもう検査はすみ・・・善吉が待っている託児室の方へと向かっていた。

その道中。

周囲が急に騒がしくなってきた。

「おい！！ 13番——黒神めだかはどこに行った！？ 探せ！！！」

「まだそんなに遠くに行つてないはずだ！！」

・・・

どうやら誰かが逃げ出したみたいだ。

「黒神・・・めだかつて・・・ああこの間のあのコか・・・あの
みそぎくんと話をしてから表情が凄く硬くなっちゃってちよつと心
配してただけど・・・こんな事になっちゃったなんて。 みそぎ
くんも退院してるみたいだし、」

心配だったけど、

とりあえず、搜索の方は先生方に任せ。

善吉を待たせている為、先に託児室の方へ向かった。

でも・・・

「帰りが遅いと心配かけちゃうから、善吉くんに説明してから、ち
よつと僕も探してみようかな。めだかちゃんを。 っと・・・
ついた！」

そう言う間に託児室へと着き中へ入ると・・・

「む・・・？」

女のコがいた・・・

と言うか・・・ 入ったと同時に、睨まれちゃった・・・ グスン・

・

って・・・

「あ！君は・・・」

中にいたのはめだかだった。

彼女は知恵の輪を解いていた。

入ってきたのが僕だと確認すると再び知恵の輪解きに戻った。

すると直ぐに知恵の輪を解いて見せた。

「ほら解けたぞ。」

そのまま善吉に渡す。

「うわあっ！すごいねきみ！りゅうくんにかとけないって思ってたのに！！きみもすごいや！！ありがとうっ！」

善吉は喜んでいた。

「・・・礼には及ばない 私にとっては取るに足りないことだ。」

そう言っていたためだかの目は・・・

やはりあの時と同じだ・・・

「あっ！！りゅうくん！お帰りー！！！」

善吉はめだかに解いてもらった事がよっぽど嬉しかったのか、弾けるまでの笑顔だった。

「うん！！ただいま！それで　めだかちゃんも、こんにちは。」

善吉に一言いい・・・そしてめだかにも挨拶した。

「ふむ・・・」

「あははは！」

めだかは愛想なくこちらを向いただけで、善吉は笑っていた。

すると善吉は何やらパズルを取り出し、

「さっきの続きでさっ！これも解いてみて！！」

めだかにパズルを差し出した。

すると・・・めだかは無言で受け取り・・・先ほどの知恵の輪より遥かに早く解く。

「わあああ！！！！すっごいやっ！じゃあこれ！！」

善吉はさらに・・・ルビックキューブ・IQパズル・・・etc

と出していく。

めだかはさらりさらりと解いていく。

「すごいね！君！」

ここにある知育玩具はあきらかに対象年齢が高いものだ・・・

それをあつさりと解いていくめだかを見ながらそういった。

「すごくなんかない。」

唯その一言だけ言い、

パズル解きに戻る・・・

そのそつけなさに寂しさを僅かに覚えたが・・・

それを吹き飛ばすくらい、善吉はハイテンションだった。

•

この部屋にあった全てのパズルを解き終わった。

善吉はハイテンション！！

ピョンピョン飛び回っていた。

「あははは！ 転んじゃうよ？ 善吉くん！！」

そう言ったが……

やっぱり止まらない。

「君はすっごいやー! すっごいすっごいすっごーい! すっごくすっごいやー!」

凄い！その言葉のみ！

もー僕のテンションも上がったよ……苦笑

めだかは・・・

「・・・・・・・・・・さきほども言ったがすごくなんかない それにすごくたつて 何にもならない 私が生きている事に 私が生まれてきた事に 何の意味もないのだから、」

そう言った。

「それは違うよ！」

つい・・・声が大きくなってしまった。

君は・・・僕の・・・大切な人が懂れた存在だったから・・・そんな風に言わないで欲しかったし、やっぱり聞きたくなかった。

それに・・・

あの時の顔の方が今の顔よりずっと素敵だ。

めだかは突然の大声に一瞬だけ驚き、直ぐに表情を戻し こちらを見た。

「意味の無いことなんて無いよ！ねえ善吉君・・・」

すぐに善吉へと話を繋いだ。

善吉に言った訳は・・・

ほんのちよつと前まで・・・僕も世界なんて意味の無いもの・・・

こんなに苦しいのなら・・・と、

そう思っていたのだ。

そんな僕より善吉の声の方がきつと彼女の心に届くだろう・・・そう感じたんだ。

「うん！僕もこの世に意味のないことなんてないと思うけど？」

そうはつきり答えてくれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ だったら 私に教えるがよいお前たち、私は一体何のために生まれてきた？」

ため息交じりでめだかが言った。

「・・・わからないかな？君と善吉君は初めてあつたんだよね？」

そう善吉に聞く。

「うん！」

「初対面の相手を・・・僕の初めての友達をこんなに笑顔にしてくれる君だもん！」

僕がそう言つと善吉が続けた。

「うん！！きつときみは みんなを幸せにする為に生まれたんだよ！！それにきつとりゆうくんも幸せにしてくれるよ！！」

笑顔で・・・今日一番の笑顔でそう答えた。

「！！！！！！」

めだかの表情が一気に変わる・・・

先ほどの表情が嘘の様だ・・・

「善吉君・・・」

僕も表情が変わつたと感じた。

それに・・・覚えてくれたんだね・・・

自然と・・・その場にいた全員・・・笑顔になっていた。

そして・・・めだかは。

「私は見知らぬ他人を幸せにする為に・・・生まれてきたんだ・・・」

そう自分に言い聞かせるように呟いていた。

今日この瞬間から・・・

箱庭学園 生徒会長 黒神めだか に繋がる人生がスタートしたの
だった。

第4箱 「めだかちゃんが始まった」(後書き)

ありがとうございました！

第5箱 「2歳児にはちょっときついよ・・・」(前書き)

よろしくお願いします!!

子供の時既にめだかちゃんの知識の量は完成してたんだそうですね・
・

一般常識は分かってないみたいでしたが、遊園地とか野球とか・・・
苦笑

さてさて・・・この物語ではどうなるのか・・・

わかりません！ 苦笑

では!!

第5箱 「2歳児にはちょっときついよ・・・」

その後・・・暫くの間・・・

3人で遊んでいた。

めだかの表情はとても柔らかく・・・素晴らしかった。

時間がたつのを忘れるくらい・・・楽しい時間だった。

話をしてみると、今度入園が決まっている幼稚園が同じらしい。

その事に善吉は大喜び！

僕も笑っていた。

そしてめだかも同様に・・・笑っていた。

子供らしい笑顔だ。

暫くして、何かをして遊ぼう！とめだかが言い出した。

でもこの部屋の遊戯は全てめだかが制覇してしまったので・・・

めだかがどこからかオセロゲームを持ってきた。

「よし！劉一 私と勝負をするぞ！」

ビシッ！！ 凜ッ つと指を突きつけられた・・・ちよつと怖かったけど・・・苦笑

「良いよお！」

笑顔で承諾。

そしてオセロゲームがスタートした！

善吉はワクワク！って感じで見ている。

「ふむ。先攻後攻を決めるぞ。」

そう言っじゃけんをしようとする・・・が。

「めだかちゃん。僕白が好きなんだ！だから後攻で・・・ダメかな？」

そう言っつと・・・

「む・・・ふむ。それならば構わないぞ！」

軽く承諾してくれた。

「ありがとー！じゃあ・・・勝負！」

そう言って白熱したオセロゲームがスタートした・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「もう一度だ！」

めだかの声が響いた・・・

「ええつと・・・・・・・・また・・・？」

めだかちゃん・・・

6回目だよ・・・

「劉ー！貴様はすごい！私に凄いといってくれたが、貴様も凄いぞ！だからもう一度だ！」

・・・何がだからなんだろう・・・ 苦笑

そう・・・ゲームに勝ってしまったのが始まりだった。

再戦に次ぐ再戦・・・

気がつけば6回戦・・・

僕の4勝2敗の戦績だ。

いやっ！ 違う。

僕が2回目の勝利の次からワザとめだかちゃんに勝ちを譲ったって
いたのがばれてしまつて・・・

それがめだかに更に火をつけたようだ・・・

「情けは無用だ！私は全力の貴様と戦いたい！」

そう言つて・・・気がつけば更に1勝・・・

そして6回戦が終了。

めだかは徐々に打つ手の鋭さを上げていく・・・

即ち 同じような手は二度通用しない。

回を重ねることにさらに白熱していく！！

けど・・・

善吉はもうオネム状態に・・・

実際僕も眠い・・・

白熱したって・・・基本は2歳児の体だし・・・

ウトウトしていると・・・

「さあ！貴様の番だぞ！」

たたき起こされ・・・まではしないけど起こされる・・・

「はあ・・・い。」

さて・・・ここまできたらちょっと、しんどくなってきた・・・な・・・

でも万全じゃないとまためだかちゃんに言われるし・・・集中集中・・・

「あ！！！」

そうだ！いい事、思いついた！

ワザと負けようとしたらめだかは分かっってしまうけど。

これなら・・・ きっとバレないよね？

「ん？どうした？」

劉一の表情が変わった為めだかが聞いてみると・・・

「えへへ・・・ いや、なんでもないよ！ほら、めだかちゃんの番だよ！」

不敵な顔をしてめだかに言った。

「ふふふ・・・ 望むところだ！」

その表情にめだかは喜び・・・

試合が再スタートする・・・

・・・

・・・

・・・

どちらも引かぬ接戦・・・

そして・・・

めだか・・・ 34個 劉一 30個

めだかの勝利だ。

「ふ・・・ やつと貴様に勝てたな！」

「ははは！ そうだね。」

めだかが喜んでいと・・・

「ここから声がしたんだな！！！」

「はいッ！！ 他の患者さんが言っていました！」

部屋の外が慌しくなってきた

「む・・・ そうだったな・・・ 忘れていた。 私は逃げていたんだ
った。 まだ貴様のほうが勝率高かったのだが仕方あるまい・・・」

そう言うのと立ち上がり劉一と善吉の方を向いた。

「今日は楽しかったぞ！ 劉一に善吉！ では またな！」

善吉は眠ってしまったが・・・ とりあえず僕は笑顔で手を振った。

そう言つてめだかは手を上げ先生たちのほうへ向かった。

いろいろと注意を受けていたが彼らと遊んでいたと説明し、

とりあえず医者達は納得した。

如何に異常性アフノーマルがあつても子供・・・

遊びたいと言う気持ちは止められないだろう。

めだかは最後にもう一度世話になつた劉一と善吉に礼を言おうと振り向くと・・・

「・・・・・・・・！！あれは・・・」

めだかは・・・驚愕した。

その表情は初めて見る顔だった。

オセロゲームのボードを遠くから見ると・・・

それは・・・その配置はある模様になっていた。

近くにいたから気付かなかったのだろう。

それに白熱していた事もあるだろう。

それは・・・

「ははは・・・ オセロでパンダを作っていたのかい？」

「ふふふ・・・ かわいいわね！」

普段のめだかと違って、子どもらしいめだかを見てその場にいた大人たちは微笑んでいた。

そうオセロ盤を遠くから見ると一目瞭然だ。

模様がパンダのようになっていた。

めだかはというと・・・

「誘導されてたのだな・・・それに私は全く気付いてなかったのか・・・」

そう呟いていた。

そして、部屋の方を振り向いてみると・・・

善吉が眠っている劉一為一人片付けをしていた。

そして目があつ。

すると・・・

ニコッ・・・

笑顔でめだかを見つめた。

どうやらこの勝負の意図をめだかが理解したことに気付いたようだ。

その証拠にオセロ盤だけは片付けてなかった。

「ふふふ・・・劉一・・・面白いな・・・やはり。」

めだかも笑った。

不思議と・・・悔しさとかは全くなかった。

めだかは・・・超えるべき男が現れた事に純粹に喜んでいた。

単純なオセロゲームに過ぎないと傍からはそう思うかもしれない。

しかしそんな単純な遊びであっても、自分より上にいる者などにあったことは無い。

そう・・・これまでは大人でさえそんな人に合っなどはいなかったからだ。

自分より上の男が現れるなど...

心踊らないわけが無い。

それに私に「生きる意味」を教えてくれた善吉・・・

自分にとって かけがえのない者達との出会い・・・

「これから楽しみにしておるぞ。 劉一！それに善吉もな！」

そう言つて託児室から出て行つた。

・・・

・・・

「最後の笑顔が何か怖いような気がしたけど・・・ 大丈夫だよね・・・
仕掛けは分かつてもらえたみたいだけど・・・」

最後の笑顔・・・

それにちよつと寒気が・・・ 走るような・・・

そんな感じが・・・

「ふああ・・・ むにゃ・・・ あ あれ・・・？めだかちゃんは？」

そこで善吉が目を覚ました。

「あ！おはよ 善吉君、めだかちゃんなら帰つて行つたよ。看護婦さん達に呼ばれてさ。」

「そーなんだ・・・寝なきゃよかったよ・・・」

善吉はちよつと残念そうにしていた。

「幼稚園も一緒なんだし、また合えるさ!」

落ち込んでいる善吉を慰める。

すると、直ぐに元気になった。

あれだけ ハイテンションだったからかな?? 苦笑

でも・・・うん。元気が一番だね。

そして・・・

「2人ともー 帰るよ!!」

瞳先生が迎えに来た。

「あーはい!」

「うん。」

2人は託児室をでた。

第5箱 「2歳児にはちょっときついよ・・・」(後書き)

ありがとうございました!!

第6箱 「えつと・・・説明会があるんじゃない・・・」(前書き)

ちよつとこの話は長いですー!!

話を中々切れなかったので・・・苦笑

話と話の区切りはやっぱ難しい・・・

作者はとりあえず先に書いてあとで区切るから・・・苦笑

とりあえず・・・ガンバリマス!よろしくです!

第6箱 「えっと・・・説明会があるんじゃない・・・」

帰宅途中。

「今日託児室にめだかちゃんに来ていたってホントなの?」

瞳さんが2人に聞いていた。

「うん！ほんとだよ！」「はい。」

2人同時に答える。

「そつか・・・いい友達ができたんだね。」

瞳さんは笑っていた。

善吉も笑顔だった。

それに凄くご機嫌なのか、辺りを走り回ったり飛び跳ねたりしていた。

「あははは・・・まだあんなに元気だ、善吉君。そっか、善吉君眠ってたんだったね。僕とめだかちゃんと勝負してた時にさ。」

僕は笑いながら善吉を見ていた。

生憎ちょっと疲れているため・・・善吉のようにはしゃいだりするの今はちょっとねえ・・・

「え??劉君!ちょっとまって、貴方めだかちゃんと何かしてたの?」

瞳さんが驚きながら聞いてきた。

「え?あ・・・はい。めだかちゃんとずっとオセロゲームをしてましたよ。」

ちょっと驚いたが、直ぐに素の表情に戻り話した。

「へ・・・へえーでさ!結果はどうだったのかしら??」

なんだか瞳さんの笑顔がきこえない・・・

「えーっと・・・僕の4勝3敗だったかな??あ・・・最後のめだかちゃんがどう思ってるか分からないけど・・・ちよっと仕掛けをしたから!」

笑いながらそう答えた。

瞳 side

仕掛けをした・・・？それに・・・あの、めだかちゃんに・・・勝った！？

瞳さんはめだかの状態がすっかり最初の頃と変わってしまったことが不審に思っていたが・・・

何故変わったのかは 劉一の言葉ではつきりとした。

めだかはこの病院に来る前・・・

異常な程の成長スピード、そして知識の量・・・

もはや博士号を持つ科学者でさえ凌駕するほどの知識をもっていたのだ。

当然周りの大人たちは天才だともてはやした。

そして何人もめだかの知識を頼り・・・そして、頼った者の殆どがが挫折していたのだ。

当然だろう。

自分のためまぬ努力の末に培ってきた結晶・・・

それが生まれて僅か1年やそこの幼い子どもに遅れをとってしまったのだから・・・

築き上げ来た物が・・・足元から崩れていくような感覚になったのだろう・・・

そんな彼女めだかを見た時・・・

言っていたのが。

「人間は無意味に生まれて無関係に生きて無価値に死ぬ 世界には目標なんか無い人生に目的なんて無いそうであろう・・・？」

冷めたような目でそっくり続けるのだった。

何日間か瞳が問診したが、それが変わる事はなかった。

それが今日まさに変わったのだ。

そのきっかけは・・・

s i d e o u t

「君だったんだね・・・」

瞳さんがそう悟ったように言う。

「え???何がですか??」

当然何のことか分かってない劉一はキョトンとしていた。

「いーえ!なーんでもないわよん、これからも善吉君をよろしくね!」

最後には瞳さんは弾けんばかりの笑顔だった。

「??? もちろんですよ! 大切な友達なんですから!」

劉一はよく分かってなかったが。

最後の部分はよく分かった・・・

だからもちろんだと言った。

瞳さんは笑顔だった・・・

ただ・・・

何かぎこちない感じがしていたのだけど・・・

それは、めだかちゃんと勝負をしたと言う前から感じていた。

(何かあったのかと思ったけど・・・ 大丈夫だよな???)

その表情に少し不安を覚えていたのだけど……

とりあえず、ひとまず安心をし、家へと向かっていった。

.....

•

数日して・・・場所は、

【箱庭幼稚園】

そして今日は箱庭幼稚園入園式！

とりあえず僕には親はもういない為、瞳さんが親代わりとして出席してくれていた。

案の定めだかも行っていた通り、同じ幼稚園だった。

そして園長先生の話しも終わり。

入園式は何事もなく終わった。

が・・・その後大変だったんだよね・・・

「ふむ・・・やっと来たか、」

教室に入ると・・・

めだかがいた。

「あ！めだかちゃん！！おはよー！」

善吉は走ってめだかの下へと向かう。

「やあ！めだかちゃん。おはよう。」

少し遅れて劉一もめだかの元へと向かった。

「ふむ。おはよう2人とも。以前は世話になったな。」

めだかがそう言うけど・・・

世話？

「ん？？ああ！病院の託児室のことだね？いいよそんなの！楽しかったし！ねえ 善吉君。」

笑いながら答えた。

「うん！僕も楽しかったよ！！」

善吉も同様のようだった。

「それについて劉一！貴様に話がある。」

めだかは劉一にビシッ！！　凜ッ　　つと指を突きつけた。

「え・・・つと・・・何かな？？」

恐る恐る聞き返すと・・・

めだかが何やら取り出した。

「貴様にオセロゲームは完全に完敗してしまったからな、次はこれで勝負だ！！」

そう言っ取り出したのは将棋盤。

それかなり立派な・・・

「ええつと・・・　もーちよつとで　幼稚園の説明会・・・始まるよ??　めだかちゃん、その後に・・・「ダメだ！！」・・・はい。」

どうやらあの日以来、

僕はめだかにターゲットにされたみたいだ。

とりあえず・・・

一度言い出したらめだかはぜんっぜん曲げないから・・・

「では私が玉将だ。貴様より下だからな。」

そう言っつて将棋の準備をしていった。

僕がルール知ってるかどうか分かつてるのかな？？

「ええつと・・・ ルール」はもちろん知っておるな？」うん・・・
知ってる。」

それは絶対事項だったようだ。

後で聞いたんだけど・・・

「私に勝っているのだから私が知っていて貴様が知らない事などないであろう？」という理由みたいなんだ・・・

いやぁ・・・勝ったのつてオセロだし・・・

知識はちよつと関係ないつて思つてた・・・

これはちよつとだけ後の話である。

で・・・

とりあえず・・・

平手戦配置をして、玉であるめだか側からスタートした。

「ではゆくぞ！以前のように情けはかけるなよ？」

言われなくても・・・

何やら殺気みたいなのが発してるし・・・

クラスの間みなも最初はバラバラで遊んでいたのだが・・・

尋常じゃない気配をさっちし、皆消極的になっていた、苦笑

流石に泣き出したりするコはいなかったけどね。

「うん。お手柔らかに頼むよ。」

そう言い。

序盤戦がスタートした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして対局98手目・・・

「王手・・・詰みだね」

そう静かに宣言したのは・・・

劉一だ。

「くっ・・・」

めだかは暫く答えなかったが・・・

「ふ・・・ははははは！ そのようだね。ここからの反撃はもう不可能だね。私の負けだ。」

負けたのに何か清々しいといった様子だね・・・

「あ・・・はははは・・・ 僕も楽しかったよ。接戦だったしね。」

そう2人で笑い合ってた。

他の園児達はと言うと・・・

善吉以外は外で遊んでいた。

教室の雰囲気がピリピリしてたせいだろう・・・

そして幼稚園の先生達・・・保護者達は固唾を吞んで対局を見守っていた。

名人戦を見るかのように・・・

今日は確か説明会があつて・・・いろいろな話をしてくれるんじゃないかつたっけ??

つて言つてみたかつたけど。

こんな雰囲気を作つた張本人だからそれはやめた。

そして・・・

長い長い入園式の日幼稚園は終わりを告げ・・・

なかつた!!

「では、もう一局だな!」

めだかのこの一言で・・・

「・・・・・・・・え?」

一回じゃなかつたんだ・・・つて思つてたけど。

諦めて、もう一度打つ事になった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

戦績で言つと・・・

その日の勝負は劉一の5勝4敗だった。

「はぁ・・・そろそろ帰るわよ？りゅうくん、めだかちゃん？」

瞳さんがその声を掛けてくれなかったらどこまで続いた事やら・・・

「むう・・・そうか　もうこんな時間か、ふむ　楽しかったぞ。ではまたな。」

めだかはかなり名残惜しそうにしていたが・・・

顔をニヤつかせながら立ち上がる。

（やはり・・・私の目に狂いは無いな。奴こそ私の目標・・・　超えるべき男だ！）

対局を振り返ると・・・

徐々にはあるがめだかが勝っていった。

・・・が。

結局は劉一の後塵を拝してしまう。

最終的に見ると 私が負けてしまう結果になる。

いつ私は奴を超えられるのか・・・

それが楽しみでしかたないのだ。

そう言っただけか？立ち上がり父親らしき人に連れられ・・・

リムジンで帰っていった・・・

「リムジン・・・初めて生で見たかも・・・」

と言って苦笑いする。

「やっぱり リゅうくんめだかちゃんはずっといやーどっいつ遊びかわかんないけど、伝わってくるよー!」

善吉は笑顔だった。

悪いけど・・・

「あははは・・・僕は結構疲れたりしてるけどね・・・」

つと歯切れの悪い言葉を残す。

「そりゃあね、あのめだかちゃんとあそこまでやつちゃうんだから。」

瞳さんも感心を通り超して半ば呆れてるって感じだった。

「やつぱりりゅうくんは凄いな、善吉君の言ってる通り。」

瞳さんまで褒め倒してくる・・・

流石に照れそうになっちゃったよ・・・

「でもめだかちゃんも凄いですよ。一度見せた戦法は全く通じないんですから・・・あのまま続けてたら・・・最終的に僕が負けていたと思いますね。今日は勝ち逃げできたってところですね。」

そう言っただけウインクした。

（確かにめだかちゃんの観察力ならば即座に順応していくんだけど・・・そのめだかちゃんに負けないほど能力が向上していくんだもの。貴方の方がめだかちゃんより何枚か上手ってことは間違いないと思うわよ？こう言っても多分はぐらかすと思うけどね。）

瞳は笑っていた。

これほどの異常者は今だ見た事が無い。
アブノーマル

いや・・・

1人例外がいたわね。

でも・・・異常・・・
アブノーマル いやそれ以上のそれ以下の・・・

わからない何かだ。

そう・・・私の初めての挫折を・・・味わせてくれた・・・コ・・・

瞳は直ぐに頭を振った。

今は過去の事より 現在を見つめなければならぬからだ。
いま

それにしても・・・

今日は驚いてばかりだね・・・

それにめだかを見ても十分驚いたのにそれ以上だということも今日改めて分かった。

私に特に深く関わってるこのコとめだかちゃんを・・・ちゃんと見

守らなきゃね・・・

それが私の・・・心療外科医としての最後の仕事・・・だから。

第6箱 「えつと・・・説明会があるんじゃない・・・」(後書き)

ありがとうございました!!

第7箱 「みんなで仲良く鬼ごっこ……のはずだよね……?」 (前書き)

よろしくお願いします!!
めだかに勝てるのかな♪

第7箱 「みんなで仲良く鬼ごっこ……のはずだよね……」?

今日も一日!がんばろうーってことで!

僕と善吉君は幼稚園にいます。

とりあえず……

病院ではオセロ、

幼稚園の初日は将棋、

今度は何が来るんだろう……?

って考えてました。

なぜなら……

めだかちゃんが凄く笑顔だったからです。

そう 勝負をする前の……

苦笑

そして次はなんと!!

鬼ごっこ!!

・・・え？

室内から突然お外で元気よく遊ぼうと言う事になったみたいです。

理由は、

「ねー 僕も遊びたいよ!」

つと善吉が言ったところから始まりました。

それで、園内の運動場を使った鬼ごっこ大会?が開催されました。

ワッッ!! パフパフパフッ・・・!

・・・

・・・

・

「で・・・なんでこうなったのかなあ？めだかちゃん？」

僕はため息をつきながらめだかちゃんに聞く。

「ふむ・・・他のメンバーは皆私が捕えているからな！後は劉一、貴様だけだ！貴様相手にあのルールでは私が不利のようだったな！これならば公平であろう！」　凜ッ！！

らしいです・・・

最初から思い出そう。

ええっと・・・

確か参加者は10人ほどで・・・この幼稚園の運動場・・・幼稚園の運動場なのにサッカーグラウンドぐらいの広さが合ってね・・・いくら遊び隊盛りの園児でも流石に広すぎるから、鬼を複数決めようとか、範囲を絞ってやろうよ！とか、様々な意見が子供たちから出まして・・・

そこで、めだかちゃんが・・・

「鬼なら私がやろう。何処へなりと逃げるが良い！そして、制限などつけなくても良いぞ？」凜ッ！

って言い出したのが始まりだった。

みんな鬼はあまりやりたくなかったんだね？

みんな喜んでたし、何より何処へ行っても良いというめだかちゃんルールに更にヒートアップしたみたいだ。

「めだかちゃん・・・？いいの??ここ　だーいぶ広いよ??」

善吉はちよつと心配そうに言うが。

「ふッ・・・望むところといったところだ。私は誰からの挑戦も受けて立つし、制約なんてみみっちい事は言わないぞ?」

唯の鬼ごっこのはずなのに・・・

何やら雲行きが・・・

めだかちゃん・・・さっきから僕の方を見てるし・・・

（これは早々に捕まった方が・・・「劉一ッ!」

ビクッ!!

「・・・良からぬ事を考えてはいないよな??」

あ・・・あれ？

声に出たのかな？？

「え・・・つと、僕？何も言っていないよ・・・？ねえ 善吉君？」

直ぐ側に善吉がいた為、確認の意味も込めて聞いてみた。

「え？ うん！りゅう君何にも言っていないよ！」

善吉は笑顔で答えてくれた・・・

（うん！何も言っていないみたいだね！）

安心していると・・・

「・・・話を聞いてなかったのか？良からぬ事を考えてはいないよな？つと聞いておるのだ。」

めだかはジト目で見ている・・・

（うつ・・・ 頭の中読めるの？めだかちゃん・・・）

とりあえず・・・

ズルで捕まるのは認めてくれないみたいだ・・・

僕に関しては・・・全力でと くぎを刺されてしまった・・・

何で僕？？

「ふむ 準備も整ったようだな？ふむ・・・そうだルールを追加するぞ！」

めだかが何やら思いついたのか、話したした。

「休み時間は丁度今から10分ある・・・あの時計で5分間逃げ切ったらお前たちの勝ち！そしてそれまでに1人でも私が捕まえられなかったらお前たちの勝ちでどうだ？」

めだかが宣言した。

周りはルールを理解していて・・・

次のめだかの言葉に更にヒートアップした。

「もし・・・お前たちが勝ったのなら、この間のようなお菓子を前たちにやるうではないか！」 凜ッ！

以前・・・

入学祝？でめだかのスポンサーであるお菓子会社が幼稚園に送ってきてくれていたのだ。

当然みんな喜んでいた。

歯はしっかり磨いてね？と先生に言われていたけど。

「「「「わーーーーーい！！やたーーーー！！」」」」

歓声が上がる・・・

「めだかちゃん！ほんとだね？嘘ついたらヤダよ！」

みんな同じだった。

「ふむ・・・この私に二言は無い！・・・私から逃げ切れたらの話しだからな・・・」

不敵に笑う・・・

ここにいるみんなはまだめだかとの付き合いが短い為か・・・

勝ちをあんまり疑ってなかったんだね・・・

まあ何はともあれ・・・

「りゅうくん！がんばろうね！お菓子♪お菓子♪」

善吉も他の園児と同じように喜んでいた。

「そうだね・・・とりあえずがんばるよ・・・ちゃんと監視の目も厳しいみたいだね。」

劉一は苦笑していた・・・

「よし・・・では準備も出来たな？では・・・逃げるがいい！」
凜ッ！

めだかの号令?と共に、

第一回箱庭幼稚園鬼ごっこ大会《仮名》がスタートした。

幼稚園の運動場とは思えないほどの広さの運動場を・・・

逃げる逃げる園児達・・・

傍から見れば無邪気に走り回る楽しそうな子供たちなんだけど・・・

「ふん！」

めだかが何やら力を入れるような声を出すと。

「うわッ!」「ええ!」「うそだー!」

一気に3人捕まっちゃったみたいです・・・

(・・・善吉君　めだかちゃんって足に何かついてるのかな?)

小声で一緒に逃げている善吉に聞く。

「あははは！めだかちゃんすっごいや！」

善吉は相変わらず能天気で笑っている。

だってまだまだ始まったばかりだしね・・・

とか何とかしてるうちに・・・

更に4人が捕まり・・・

残り3人！

所要時間・・・0・5分？

1人あたり大体4秒も掛かってないな・・・

鬼ごっこは、障害物（ブランコ・すべり台）を中心に円を書くように逃げていると相手が疲れるとかしないと捕まる事は無いと思うんですけど・・・

めだかちゃんにはそう言った常識はあまり通じないみたいです。

相手の動きを観察して・・・目の動きを観察して・・・筋肉の収縮具合おも観察して・・・

次の動きを予測・・・そしてまるで瞬間移動のような動き・・・

気付いたら前にいた！ってみんな言ってるよ・・・

って・・・やりすぎだよ・・・

「ほんとにすっごくすごいや！めだかちゃん！」

善吉君・・・

仮にも仲間がどんどん鬼に捕まっていつてるのだからもうちょっと危機感を・・・

まあ遊びだからね・・・

でもお菓子掛かってるって事忘れたのかな？あんなに嬉しそうだったのに。

まあ僕はあまり甘いものが好きって訳じゃないからどっちでもいいんだけどね。

唯手を抜いたら怒られる・・・

「善吉君！このままだと僕たちもあつという間に捕まっちゃうからここは分かれて逃げよう！」

固まっついてはいいのだからね。

そう善吉に提案すると。

笑顔でOK!ッといってくれた。

「めだかちゃんは凄いけど！僕だってがんばるよ！！ りゅう君もがんばってね！」

そう言って二手に分かれた。

「よし・・・ これで多少は時間が・・・」

っていつてるうちに・・・

「よし！捕まえたぞ！！善吉！」

「うわあっ！」

めだかと善吉の声が・・・

振り返ってみると・・・

その言葉どおり、善吉が捕まっていた。

「うひゃああ・・・ 凄いね！ めだかちゃんはやっぱり！」

善吉はちよつと悔しそうにしていたが。

直ぐにもとの調子に戻った。

「ふ・・・では 最後だ！ゆくぞ？劉一！」

笑顔が凄くまぶしいよ？

・
・
・
・
めだかちゃん
・
・
・

第7箱 「みんなで仲良く鬼ごっこ……のはずだよね……?」(後書き)

後編に続くつて所ですかね? 笑

ありがとうございました!!

第8箱 「ええ！まさかの延長戦なの・・・？」（前書き）

よろしくお願いします！！
さあ頑張つて！りゅくん！！

第8箱 「ええ！まさかの延長戦なの・・・？」

めだかちゃんは、まるで肉食獣の様な鋭い目をしていて・・・

何か怖い・・・ 苦笑

結構めだかちゃんと距離があつたけど・・・はつきり見えたね。

足に力を溜めてる・・・

そして、

一気に距離を詰めてきた！！

擬音をつけるとすれば・・・

ギューン！！！！！！

かな？

とりあえず・・・

「たあ！！」

声と同時に地面を蹴り。

めだかが伸ばしていた右手に触れないように後方へ捻りをくわえながらジャンプし回避した！

「何ッ！」

めだかは今日初めて驚きの顔をした。

「危ない危ない・・・ 早いねーめだかちゃん。」

劉一はにこやかに笑っている。

めだかは確かに触れたと錯覚するぐらい完璧な不意のつき方だったのだが・・・

回避された。

めだかは・・・

（やはり 流石 劉一だ。身体能力も私を抜くのか？面白いな！）

めだかは凄ーい・・・

笑顔だった。

「ふう・・・（捻りを入れたのはめだかちゃんを視界から逃がさないようにする為だったけど・・・ちよつと派手だったね・・・周りの視線が何か恥ずかしい・・・）」

^{せんせい}大人たちはと言うと・・・

将棋戦の時と同様・・・

何やらスポーツを観戦するようなノリで見ていた。

もー何しても驚かない！って感じだね・・・

先生達は・・・ 苦笑

「・・・では行くぞ！ 最近になり少しかりやっておる剣道の技を見せてやろう・・・」

そう言つと・・・

タツ　タツ　タツ　タツ　タツ　タツ　タツ　タツ
タツ　タツ！！

でたー！！　忍法分身の術！！

つて・・・

「ええええ！増えた！！剣道なの？？これ？？」

これには流石に驚いたよ・・・

いや普通驚くね。流石じゃなくてもさ・・・

驚いたけど・・・

ちよつと燃えてきたね！

負けないよッ！

「よし！なら全員のめだかちゃんから逃げて見せるよ！」

そう言うところ・・・僕も駆け出した。

バツ！！

めだかが胴体を狙って飛びついてきたら・・・

イナバウワー！で回避！

バツ！！！！

肩にタッチを狙ってきたら・・・

体を捻ってスカぶり回避！

バババババツ！！！！！！

分身のめだかちゃんみんなが一斉に僕を狙ってきたら・・・

ハイジャンプで回避！

その時、めだかちゃん同士がぶつかってるみたいな錯覚に陥っちゃったよ・・・

激しい攻防は暫く続き・・・

残り15秒！

「はあはあ・・・」

「くう・・・」

2人とも疲れていた・・・当然だと思っけどね・・・

「時間も時間だ・・・これで決着だ！劉一！」

「うん！」

めだかが最後に選んだ手段は・・・

最初に使っていた瞬間移動だ！！

でもさっきより断然早いような気がする・・・

これって・・・黒神ファントム簡易版・・・？

でも！

「よし！これで最後だ！負けないよッ！！って わああ！！」

逃げようとしたんだけど・・・

劉一は足元を滑らせてしまいバランスを崩してしまっていた。

「よし！もらったぞ！劉一！」

それを見ためだかが抱きつくように飛び掛ってくるが・・・

スカッ・・・

「何ッ！」

その両手は空を切った。

なぜなら・・・

つるッ!!

「え!?!」

劉一はバランスを崩しただけではなく。

ドテッ・・・!

地面に倒れてしまったからだ。

めだかはダイビングヘッドをするように劉一に飛び掛ったのが仇となり・・・

その両手は何も掴むことなく、劉一を飛び越えてしまったのだ。

その瞬間。

~~~~~♪♪♪♪♪

セットしていたタイムアップの音楽が響いた・・・

つまり！

「やったー！りゅういち君が勝ったー！」「わあーい！お菓子だー」  
「ばんざーいばんざーいー！」

後ろから歓声上がる・・・

「いたたた・・・鼻打っちゃったよ・・・（涙）・・・  
ん？あれ？ そっか終わったんだ・・・何かすんごく長い５分だ  
ったよ・・・」

周りの歓声を聞き、TIME UP したのだと確認。

めだかちゃんのところへ行き。

「あはは・・・最後は危なかったよ・・・さすがめだかちゃんだ  
ね！」

そう笑いながらめだかに言う。

「ふふふふ・・・そうだな！だが劉ー！貴様も流石だ！」

めだかも笑っていた。

頭脳だけじゃなく、身体能力でも超えるべき男だと分かってしまったためだ、

文武の全てを・・・

同等・・・それ以上・・・

嬉しいかぎりだ！ 対等の者もいなかったのに・・・な。

これでは顔が破顔せずにはいられない！らしい・・・

「では、勝者の皆に約束の物を配るとしよう。後劉一！話があるから幼稚園が終わっても帰るで無いぞ？」

めだかはこれでもかって言うくらいの笑顔を見せながら言う・・・

ちょっとこわいよぉ・・・

「う・・・うん・・・いいよー！」

引きつった笑みになったのは仕方なかったと思いたいね・・・ 苦笑

今日の僕は幼稚園内のヒーローになった。

その名も・・・

【鬼ごっこマン！】

さすが・・・園児達・・・ まあ僕も園児なんだけどね。 苦笑

んで・・・ めだかちゃんと約束の時・・・

「よし！来たな！では はじめるぞ？」

めだかちゃんがなにやら言い出した・・・

何も説明受けてないけど・・・

「ええつと・・・何をかな？」

恐る恐る聞くと・・・

「何って・・・先ほどの続きだ。」

・・・え???

ええっと・・・もう一度考えてみよっと・・・

・・・・・・・・・先ほど？

って言うと・・・・・・・・・？

・・・・・・・・・鬼っつー？

えー！ー！また！ー！

初めへ戻る・・・・・・・・・（第7箱参照！）

「ええ！！なんで僕だけ？・・・なんでこうなったのかな？めだかちゃん？」

そう言うと・・・

「ふむ・・・他のメンバーは皆私が捕えているからな！後は劉一、貴様だけだ！貴様相手にあのルールでは私があまりにも不利のようだったのな！これならば公平であろう！」　凜ッ！！

だそつです・・・

悲しい事に・・・

瞳先生は今日は遅れてくるようで・・・

止めてくれる人がいないなあ・・・

善吉は他の友達とお菓子を幸せそうに頬張ってるし・・・

「ではゆくぞー!!」

「うつひゃああー!!」

こうして・・・鬼ごっこは始まり・・・

そして、

計1時間5分もの全力鬼ごっこは終了を次げた・・・

もちろん最終的に止めてくれたのは瞳先生・・・

助かりましたよ・・・・・・・・・・

「つかれたよ・・・・・・・・」

「今回は引き分けだな？ 私の2勝2敗でな！」

めだかちゃんは凄く満足してて、

とても可愛い笑顔だったので。

まあとりあえず、この笑顔を見れたからヨシと・・・

「ちょっと・・・割に合わないかも・・・」

疲労具合から考えたらね・・・

「む？？なにがだ？」

「なんでもないよッ！！」

慌てていい・・・

長い長い1日が終わった。

第8箱 「ええ！まさかの延長戦なの・・・？」（後書き）

長いでしょうね・・・ 1時間ぶっ通しは・・・

ガキの使いやあらへんでの罰ゲーム

【24時間耐久鬼ごっこ】以上に疲れると思うなあ・・・ 苦笑

ありがとうございました！！

第9箱 「私の家に来るが良いぞッ！」

凍ッ！（前書き）

よろしくお願いします!!

ちよつと短い話ですが・・・ 苦笑

タイトルはもちろんめだかちゃんセリフです。

リニューアルしてみました！

劉君目線ばかりじゃ 飽きちゃいそうだったので、 苦笑

第9箱 「私の家に来るが良いぞッ！」

凜ッ！

はぁ・・・

毎日毎日めだかちゃんに勝負を挑まれてて大変だなぁ・・・

って考えてる2歳児の劉一です・・・

頭脳戦では精神力を・・・

体力戦ではもちろん体力を・・・

本当に・・・疲れたなぁ・・・肩がこりそう・・・って、

本当に2歳児の言葉じゃないね。

とりあえず・・・

殆ど引き分けて言うのが中途半端なような気がするけど・・・

戦り終わった後のお礼を言うめだかちゃんの笑顔はほんとに可愛い  
なぁ・・・って感じてます。

これの究極版が後の真骨頂その？「ツンデレ」である・・・。

って言うのは後の話です。

この1、2ヶ月は主に僕とめだかちゃんとの対決が殆どメインでした・・・

大変だったのは言うまでも無く・・・

ある程度それが落ち着いてきた頃、

（恒例行事にならなかったのが良かった・・・）

「今度の日曜日、家に遊びに来るが良いぞッ！」  
凜ッ！

つと誘われた。

善吉は当然喜んでいて・・・

「うん！僕めだかちゃん家遊びに行きたいよ！」

大賛成だった。

「そっか」 ええつと僕「当然劉一も来るよなッ？」・・・うん。  
「

言い切る前に・・・

もう参加は絶対事項みたいなんです。

僕と善吉君は………というか多分僕かな？絶対事項って言うのは……

「うむ！では明日はちょうど休みの日だ。迎えに行くから家で待機していてくれ！」

めだかは凄く嬉しそうに笑っていた。

（そんなに嬉しかったのかな？ねえ 善吉君？）

嬉しそうに歩いていくめだかを見ながら善吉に小声で話す。

（何言ってるのさ、りゅう君！りゅう君の事が好きだからに決まってるじゃん！）

っとキツパリ善吉は言い切った。

いつもニコニコ、思ってる事とハッキリ伝える善吉が小声になって話していた事は多少驚いたけど……

「えええ！まさかー！僕毎日のように痛めつけられてるんだよ？」

つい大声になってしまった…… 苦笑

「む？何か言ったか？」

その声に気付き（当然だけど）めだかが振り向いた。

「いつ いや！なんでもないよ？なんでもないなんでもない・・・」  
手をぶんぶん振りながら答えた。

「?? まあ良い。ではまた明日な、2人とも。」

そう言い、めだかは迎えに来たリムジンに乗り込んだ。

明日は・・・アレに乗るのかな？

ん・・・緊張するね。乗った事無いし！ 苦笑

それはともかく・・・

「もー りゆう君！びっくりするじゃんか！突然あんなに大声出して・・・」

善吉はムスツツとした表情でこちらを見ている。

「ええ！だって善吉君が突然あんな事いうんだもん・・・」

「えー？りゆう君の事、めだかちゃんが好きだと思っよ？ 第一僕だつてりゆう君の事だーい好きなんだし・・・ りゆう君は違うの・・・？」

善吉はちよつと辛そうにしながら聞いていた。

．．．．．なるほど．．．．．

そう言う好きね．．．

いけないいけない．．．

頭の中じゃ僕．．．歳が結構いつてるけど（100歳以上かな？  
？ 100年って言うってたし．．．苦笑）

今は2歳児なんだった．．．

「あつ．．．ゴメンゴメン！！ 僕も好きだよ！2人の事！！」  
慌てて肯定した。

「そつか！よかった！！ 驚かせないでよ りゅう君！ 明日は  
楽しみなんだから！」

善吉は直ぐに笑顔に戻った。

「めだかちゃんのお家はもの凄く大きいらしいよ！りゅう君！！で  
ね．．．．．」

笑顔で更に会話は弾む。

瞳さんを待つ時間は。

「めだかちゃん家へ」の話題中心になった。

善吉は楽しみで楽しみで仕方ない！！といった様子だ。

まあ・・・

「あははは、僕も楽しみだよ！さすがにめだかちゃんの家でバトルをしたりとか・・・無いよね？それだけがちょっと不安なんだ・・・」

最後の方になると・・・

徐々に声のトーンが下がってゆく。

「えー！あんなに楽しそうに遊んでいるのに？」

善吉はキョトンって感じた。

あのような非現実なバトルを楽しいといえますか？善吉君。

身体能力のおかげで、めだかちゃんと渡り合ってはいるけど、

ちよつとでも、「もういいや・・・」って思ったらめだかちゃんにくぎを刺されるんだよ？

常に全力で！！って・・・

流石に「遊び」の次元じゃないと思うんだな・・・僕はあ・・・

「・・・善吉君もいずれ分かると思うよ？ アレが楽しい事かどうかはね。」

そう未来予測のように言うと・・・

「そっか！何か楽しみだよ！！」

笑っていた。

そう・・・金色の髪に負けないほどにキラキラと・・・

あわよくば・・・

ずーっとこの笑顔でめだかちゃんと一緒に付き合ってもらいたいです・・・

もちろん僕ともね。

「う・・・うん！だいじょーぶ！すぐだよ！きつと・・・ね。」

・・・

僕がこの世界にいることによって、多少は原作と変わったりすると思うけど・・・

めだかちゃんに振り回される様子の善吉君の未来は何故か鮮明に見えた気がしたね・・・

そこには僕も混じってるかも・・・

とか何とか考えながら。

瞳さんが迎えに来てくれた為、

その日の幼稚園は終了した。

明日の事を楽しみにして。

もちろん！瞳さんおかあには了解を得てますよ！

子供の外出だから当然でしょう！

さて・・・明日はどうなるのかなあ・・・

楽しみだけど不安もあり・・・

五分五分って感じだった♪



第9箱 「私の家に来るが良いぞッ！」

凍ッ！（後書き）

ありがとうございました！

さて・・・次はめだかちゃんの家に行こう！  
スッゴいデカイ家へ・・・

どんな事が待ちうけているのかなあ・・・？

わかりません！！ 苦笑

ガンバリマス！

第10箱 「ゆ・・・夢の中まで？」（前書き）

よろしくおねがいします!!

第10箱 「ゆ・・・夢の中まで？」

日付が変わり・・・

ここは、

【人吉家】

「ふあああ・・・もう・・・食べれない・・・よ・・・  
Z  
Z

「ちよっ・・・めだか・・・ちゃ・・・やりすぎ・・・  
Z  
Z

善吉・劉一それぞれ夢に中で楽しそう・・・

・・・?? どちらかは楽しそうというより・・・苦しそうって感じがする。

夢の中にまで・・・入っているみたいなんだね・・・めだかち

やんは。 苦笑

劉一の夢 side

「よし！ もう一度勝負だ！！今日はジークンドーの指南を受けた！それを見てくれ！！」

めだかは構えだした。

「えええ！！ またやるの？？って さっきはムエタイだって言ってたのに・・・ いったいどれだけ習ってるのさ・・・」

ちよつと疲れながら・・・驚きながら・・・そう答える。

夢も現実も変わらないな・・・苦笑

「ふふふ・・・ 見せてきたのはほんの一部だ！まだまだあるぞ？」

不敵に笑う・・・

「そんな事実・・・ 知らなきゃよかったかも・・・」

苦笑いしてしまうのは無理ないだろう・・・

「では・・・行くぞ！！」 凜ッ！

「へうつー!!」

めだかが構えだした為、劉一も慌てて臨戦態勢を取ってる・・・

「む・・・??」

めだかが急に後ろを見て止まっていた。

「??ん? どーしたの?めだかちゃん?」

勝負の寸前に止まってしまうという、らしくない行動にちよつと驚きながら聞くと・・・

「・・・ふむ。今日はここまでだな。では劉一!今日は楽しみにしておるぞ。善吉にもよろしくと伝えておいてくれ!」

そう言つと・・・

めだかは後ろを向いて歩き出し・・・視界から消えた。

「あれ・・・?消えちゃった・・・まあめだかちゃんだしそんなには驚かないけどね。」

笑いながらそう言つと・・・

「あははは そうだねえ。めだかちゃんだしねえ 僕もそう思つぜ。」

突然背後から声が聞えてきた。

「え？ あれ？ 君は？？」

驚きながら後ろを見ると・・・

女のコが立っていた。

歳は・・・ 同じくらいかなあ？

長い髪を靡かせながら立っていた。

それに風景がいつの間にか変わっていた。

これは・・・学校の教室・・・かな？

「やあやあ驚かせて悪いね。劉一君 君とめだかちゃんのバトル・  
・もつと見ていたかったけど 僕も君に会いたかったんだ。だから  
それに免じて驚かせたのは許してくれないかい？」

笑いながら・・・そう言った。

「許すも許さないも何も無いよ！別に後ろから声を掛けられたから  
って 僕は怒ったりしないしね。 ええつと・・・君は僕の名前は  
知ってるみたいだけど。僕は君のこと知らない・・・ 名前はなん  
ていうのかな？」

僕も・・・つられて笑いながら話す。

「あはははッ！悪い悪い！言っでなかったね。僕は安心院なじみつて言うんだぜ。で、親しみを込めて君には安心院さんあんしんいんって呼んでほしいな。」

「あんしんいんさん・・・ あはは！何するにも安心できそうだ。うん！わかったよ。安心院さん！よろしく。」

笑いながら手を差し出した。

「へえ・・・やっぱり君は変わってるね。」

さっきまで普通に笑顔だったのに 何故か目を細めだした。

「え・・・？どうしたの・・・？ 握手は嫌いなのかな？安心院さん。」

ちよつと驚きながらそう聞くと。

「いや、嫌いなわけじゃないぜ？ただ君は君の夢の中に知らないかわい女のコがきて話しているって言うのに何も驚かないのかい？驚かせることが好きな僕にとつてはちよつぴり傷つくんだぜ？」

「いや・・・そういわれてもね・・・ 確かにちよつとは驚いたけど・・・ 傷つくほどだったの？」

互いに苦笑しあっていた。

「で・・・ 僕に何かようがあるのかな？安心院さん？」

笑いながら聞く。

「ああ！話がちょっとそれちゃってたね。君に会いに来た理由はね・  
・」

笑うのをやめた安心院は真顔になり・・・・

「僕と付き合ってくれないかい？」

つと一言！

・・・・ええつと、

付き・・・・合う・・・・？

・・・・ま・・・・まあ　僕は2歳児だ、

ここはわからない振りを・・・・

「ん？ええつと・・・・何に付き合ったらいいのかなあ？安心院さん。  
」

顔が引きつっちゃったよ・・・・

「んー？君分かってて恍けていないかい？　また傷ついちゃうぜ？  
こう見えても僕は純粋なんだ。」

ちよつとムスツとしながら答える。

このコはめだかちゃんと同じで嘘を見破ってしまうんだね・・・

「・・・あ・・・ははは・・・ごめんなさい・・・でも、付き合つて言つたつて・・・僕2歳児だよ・・・？　早くないかな？」

今回は真面目に答える。

「ははっ　愛に年齢<sup>とし</sup>なんて関係あるのかな？」

こりやまた定番なセリフを・・・言っちゃうね。

「ってまあ　とりあえず冗談はおいといて・・・　でもまあ　8割がたは本当だから覚えておいてくれよ。」

8割の冗談つて・・・なんだろう？

ほぼ本当つてことだね・・・　苦笑

「君に興味が湧いたんだ。君はいつたい何なのかなっ？つてね。」

笑いながら答える。

「なんなの？つて言われてもね・・・僕は劉一！今は人吉家にお世話になつてるから人吉劉一・・・かな？　それ以上は・・・ちよつとわかんないな・・・」

苦笑しながら答える。

「またまた 恍けちゃって・・僕はいろんな異常者も過負荷も見てきたけど 君ぐらいなんだぜ？ 僕のささやかなスキルの1つ輪廻<sup>タシス</sup>解析で解析れないなんてさ。」

・・・・・？

首をかしげていると・・・

「ははは。分からない振りはもういいよ？ 劉一君、君は良く分か  
つてるはずだ、異常<sup>アフノーマル</sup>についても過負荷<sup>マイナス</sup>についても。僕の質問の真意  
にも、君について根本的なことは解析<sup>わ</sup>からないけど、大体の事は解  
析<sup>わ</sup>かるんだぜ？ 恍けた振りっとかさ。」

なるほど・・・

やっぱり さすがは安心院さん、恍けたくらいじゃ誤魔化しできな  
いんだね。

「はは・・・ うん 分かったよ。答えられる事には答えるよ。  
僕の出生や正体については・・唯<sup>いま</sup>の2歳児・・の異常者<sup>アフノーマル</sup>つて  
事で納得してくれないかな？ 僕はこの世界<sup>いま</sup>を楽しみたいんだ。あ  
まり思い出したくも無いって事もあるんだ。」

苦笑しながらも 真剣に答えた。

「ふうん・・・ それは本当みたいだね・・・ だけど残念だ、君  
のこともつとよく知れたかったんだけどね。不思議だよ。君の事を  
解析<sup>み</sup>れば解析<sup>み</sup>るほど、わかんなくなっちゃうだよ・・・ まあいい  
や、今日は君と話せただけでも良かったからね。」

最初こそ難しそうな顔をしていたけど・・・ 最後には笑いながら言っていた。

「君とは又いつか直接会いに来るよ。その時付き合ってくれるかどうか、答えを聞かせてくれよ?」

笑いながら話す・・・

「2歳児にはまだまだ早い内容だと思っけど・・・とりあえずうん。考えておくよ安心院さん。」

苦笑・・・

「ははっ 僕は結構真剣なんだけどなあ・・・ まあ きっと会うことになるからその時改めて君に聞くとするよ。」

そう言つと、教室の入り口のドアが勝手に開いた。

「そこから出れば夢から覚める、今日はめだかちゃんの家遊びに行くんだろ? まあさっきみたいな事の繰り返しになると思っけど、楽しんでおいでよ。劉一くん」

「いや・・・もうちょっとほかの事で楽しみたいんだけど・・・ バトルばっかじゃちよつとね・・・」

さすがにやれやれって感じだね。

「まあ そう言ってやるなよ。 君ぐらいなものなんだ、めだかちゃんと渡り合える同い年なんてさ、いや同い年に限らず君ぐらいな

んだぜ？」

安心院は座っていた机から立ち上がりながらそう答える。

「そうだとしてもね・・・さすがに毎日はね、疲れちゃうんだよ？  
安心院さん・・・」

首を左右に振りながら答えた。

「はははっ 君はさっきこの世界を楽しみたいッ って言ってたじやん。その疲れだって楽しみの1つじゃないのかな？」

うつっ！そーかもしれないけどさ・・・

「はあ・・・ そうだね」

疲れながらも楽しんでいる事に気付かれてたんだ・・・

そりゃそうだ。安心院さんだもん・・・

「はははは！図星だね。君も楽しんでるのにそれを隠そうとするなんてシャイなんだな？ めだかちゃんにちよつと妬けちゃうな。

まあいいや、そろそろいきなよ。寝坊しちゃうぜ。」

うつ・・・引き止めたの安心院さんなのに・・・ まあ いいや・・・

「・・・うつ じゃ、じゃあ！安心院さん！！また いつかッ！！」

恥ずかしくなった為慌てて教室を飛び出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あははは 思ってたよりウブなんだなあ 劉一くんって・・・」

1人残った安心院は笑っていた。

「今の時代はいい時代だ。球磨川くんにめだかちゃん。そして劉一くん。いろんなサンプルと出会えてね・・・」

笑っている顔が・・・ちょっと不気味だ・・・

「大体めだかちゃんと球磨川くんは解析わかかるんだけど・・・ 劉一くんだけが解析わかからないんだよな まあ 彼もきつと箱庭学園に来ると思うし、その時不知火くんも目をつけると思うから、その時ゆつくりと調べてみればいいや・・・」

そう言っと・・・

安心院も出入り口のほうへ向かった。

「次に会つのを楽しみにしてるからね？ 劉一くん。」

そう微笑みながら・・・教室から出て行き、この空間が消えてなくなった。



第10箱 「ゆ・・・夢の中まで？」（後書き）

ありがとうございました！

第11箱 「これに乗るの初めてだよ・・・」(前書き)

よろしく願いします!!

第11箱 「これに乗るの初めてだよ・・・」

時刻は午前6時・・・

「ふあああ・・・ むにやむにや・・・ ん？夢か・・・変な夢  
だったなあ・・・」

確か・・・

めだかちゃんと夢の中までバトルをして・・・

その後・・・

「・・・？なんだっけ？誰かと話してたような・・・」

むむむつと腕を組みながら考えても分からない。

「夢ってそんなもんだよね・・・ めだかちゃんとのバトルは強烈  
だし、毎日のようにしてたから強く印象に残ったのかな・・・ あ  
んまりうれしくないけど・・・」

頭を掻きながら苦笑していると・・・

「むにや・・・ あ・・・りゅーくん・・・ おは・・・よう・・・

「善吉も目が覚めたようだ。」

「あつ！おはよう、善吉君。ゴメンね起こしちゃった？ まだ6時くらいでちよつと早いんだけど。」

謝りながらいうと、善吉は眠そうな顔をしながらも笑い。

「いいよお・・・ だって・・・今日はめだかちゃん家に遊びに行くんだもん・・・ 早く起きてないと・・・」

そう言う・・・ 必死に体を起こそうとする。

とりあえず手を貸してあげ、2人で洗面所で顔を洗う事にした。

「あらあら、本当に楽しみなのね。こんなに早くに起きるなんてさ。」

瞳さんも起きており、いつもは起こさないと起きられない善吉まで起きていて少し驚いていた。

「だって、めだかちゃんの家に行くの楽しみなんだもん！」

「あははは まあ 僕も楽しみですね！不安はありますが・・・」

2人でそう答えた。

「あははっ 劉くんの不安はわからないでもないけど、めだかちゃんとしっかりね？もちろん善吉くんもね」

笑いながら・・・そして朝食を済ませた。

暫くすると・・・

《ピンポン》

呼び鈴が鳴った。

「あらあら？ 2人ともめだかちゃん来たかもよ？」

テレビの前で座っていた2人にそう言う・・・

一目散に飛び出したのが善吉だ。

「わぁーい!!」

そう言つて玄関へ直行！

「善吉君 転ぶよ!!」

慌てて劉一も向かう。

「しっかりね！ ケガだけには注意して！ 言ってらっしゃーい！」

瞳さんがそう言う。

「わかりました！いつてきます！」

善吉はもう先に行ってしまった為聞いていなかったが　とりあえず、僕は止まって瞳さんに返事をかえした。

「む・・・遅いぞ？劉ー！善吉は直ぐに出てきたというのに。」

玄関を出ると・・・　めだかがムスツとした表情で立っていた。

「あはは・・・　ゴメンゴメン。瞳さんにちゃんと遊びに行く事を伝えてたから遅れちゃった。」

軽く謝罪をすると直ぐにめだかは笑顔になった。

「ふむ・・・　それならば仕方が無いな。よし！では　揃った事だし行くぞ！」

そう言つてめだかは歩き出した。

あれ・・・？<sup>リムジン</sup>車来てないけど、歩いていくのかな？

「めだかちゃん、歩いて行くのかな？」

とりあえず聞いてみた。

仲良く散歩！見たいな感じでいやではなかったけど、善吉も楽しそ

うだしね。

でも・・・車で幼稚園に来るくらいだから・・・遠いんじゃないかな？

「心配なくていいぞ。もう見えてくる。」

???

何がでしょう？

「ここだ！」

そう言つて指差した場所は、

広めの空き地。

いつもなら子供たちでサッカーをやったり野球をやったりと遊び場になっていただろう。

いつもならだけど・・・

なにやらデカイ・・・すつごくでかい・・・

へりが止まつてる・・・

ええっ！マジですか??

「ええつと・・・まさかこれ？」

これって・・・所謂 軍用ヘリ？

なんでこんなのあるのさ？

「ふむ！今日はたくさん遊びたいからな！こちらの方が早く家につけるのだ！」 凜ッ！

なるほどね・・・

「わーい！ヘリコプターだ！！」

善吉君・・・

君が乗り込もうとしてるのは ソ連の軍用ヘリMi-24D・・・

ハインドDって呼ばれてるゴツイ ヘリなんだよ・・・？

って言ってもわかんないか・・・

「あ・・・ははは・・・ めだかちゃんの家には軍隊でもいるのかな？」

苦笑いしながら聞くのも仕方ないだろう・・・

「さすが劉一だな、軍用ヘリだと一目でわかったか。」

・・・

褒められても嬉しくないよ

そんなのでさあ・・・

それより軍事基地に直行するのかが心配なんだよ・・・

「ふむ、これは黒神家の私財で購入したものだ、家は日本で有数の財団らしいからな。」

なるほど・・・へえー ソ連から購入したんだ・・・ 通販？

なら民間用のヘリでもよかつたんじゃないかなあ・・・

なーんで軍用のヘリ？

んで 幼児の頼みで動かせてもらえるものなのかなあ・・・

遊びにいくの一言で？

親バカなのかなあ？？

うん・・・もうツツコのやめよう・・・

「うん、わかったよ・・・ んじゃあ今日はよろしくね？」

「ふむ！では 乗るがいい。」

「わあーい！わあーい！」

一目散にヘリに向かう善吉君と苦笑しながら後に続く劉一君・・・

そして、凜ッ！っと笑っているめだかちゃん・・・どうだ？っと言

わんばかりに。

3人はヘリコプターに乗り、黒神家へと向かった!!

いやはやヘリに乗るなんてもちろん初めての経験ですから・・・

飛んでる時は　ちょっと怖かったけどね？

善吉はずっとはしゃいでました♪

彼を見ているとこっちも楽しい雰囲気になる！

めだかちゃんも同様のようだった。

・・・でも、

ヘリの中で　まさか着くまでにまたゲームをするとは思わなかった  
けどね・・・

暫く・・・

30分くらい？かな？

フライトすると・・・

なにやら開けた場所に着いた。

ぽつんと一軒だけあって・・・周りは柵みたいなので囲まれてるなあゝあの家・・・

ええっと・・・このへりの高度結構あるよ？

それなのにあの大きさって事は・・・

「ついたぞ！あそこが私の家だ！」

そう言つて指差した場所はもちろん先ほど僕が行っていた場所だ・

・

おお！　へりポートまで！！

「わあー！大きいねえ！！　鬼ごっこやかくれんぼなんて簡単に来そうだなー！！」

更にテンション向上！

「あはは・・・　あんなとこでしたらいつまでも終わりそうに無いけどね？かくれんぼなんか特に・・・　広すぎるから・・・」

苦笑。

でも・・・めだかなら捕まえれそうだね・・・

そうやってバカ話をやってる間に・・・

到着ならぬ着陸した。

「あはは・・・ここからさらに車で移動するんだ・・・」

着陸した感想はそこだった。

上から見たら屋敷らしき建物も見えたんだけど・・・

降りてみたら・・・

と・・・とおい・・・

「では・・・めだかお嬢様・・・そしてお友達の皆様も・・・」

執事っぽいだんでいーな おじさまが優雅にお辞儀をしながら車の  
ドアを開けてくれた。  
リムジン

「うむ！」

その一言。

堂に入ってる？っていうのかなあ・・・

子供なのに違和感が無いよ・・・ 苦笑

「わーい！次はお車だー！！早くのろうー！りゅつくん！」

善吉君はやっぱハイテンション！腕を引つ張ってきた。

「ははは！うん！行こう。めだかちゃんも！」

ぎゅっ・・・

空いたほうの手でめだかの手を握った。

柔らかな手だな・・・

この手があんなに強力なんて信じられないなあ・・・

「！！・・・あ ああ・・・／／」

めだかはなにやら顔を赤らめながら一緒に駆け出した。

そして3人は車リムジンに乗り込み・・・ 屋敷へと向かった。

第11箱 「これに乗るの初めてだよ・・・」 (後書き)

めだかちゃんがりゅうくんに恋心をもってしまったかも・・・

さてどうしよっかなあ・・・あんまり得意じゃないから・・・ 苦笑

では ありがとうございます！

第12箱 「わぁー！！・・・誰？」（前書き）

こちらでも遅くなりましたが・・・  
ごめんなさい！

めだかボックスのにじ作品はたくさんあつて・・・ 内容が似てい  
くかもです・・・ そこは申し訳ありません・・・  
幼少時エピソードは外せない場面とかあるので・・・ く〇らちや  
んとか動〇の話とか変体の話とか・・・ 苦笑

温かい目をお願いします・・・ ペコリ

第12箱 「わぁー！！！！誰？」

「・・・広すぎだと思っね・・・」

言葉にでちゃったよ・・・ 苦笑

暫くして屋敷が見えてきて・・・

「・・・」

「わぁー！おっきやつ！！ 僕のお家よりずーーっとなー！！」

善吉は凄く喜んでた。

・・・帰ってそう言うこと言わないでね？善吉君・・・

きつと瞳さんがっかりするから・・・

そう思わずにいられない劉一だった・・・

「ま・・・まあ それにしても・・・ほんとに大きいね」  
500  
坪くらい・・・？」

んで敷地は山2、3個分くらい？

「大した事はないさ！無駄に広いだけだ！」

そうは言ってもねえ・・・

めだかは胸を張ってそう言った。

家の前で車を止め・・・

「では、お嬢様、お友達の皆様もどうぞ・・・」

ドアを開けてくれた。

出てみると・・・

「「「めだかお嬢様！お帰りなさいませ！お友達の皆様も！いらっしやいませ！」」」

・・・

これは・・・メイドと言うヤツかな？

TVの中でしか見たこと無いけど・・・

「わぁ！」

さすがに善吉も驚いたようだ。

結構な人数で声量で・・・ハモったしね。

「ええつと・・・メイドさん・・・かな？めだかちゃん？」

確認するように聞いたら・・・

「うむ！家で雇っておる家政婦さん達だ！いつも世話になっておる  
」！」

ハッキリ答えてくれた。

実在するんだね

こんなお家・・・

「とりあえず！家に入るがいい！私の部屋で遊ぼう！」

そう言つてめだかは家のかーい！おおきーい！扉に手をかけた。

「お城みたいだね？りゅうくん！すごいやー！」

「うん。こんなお家実在したんだねえ・・・」

めだかちゃんが扉を開けてくれたその時！

「やあやあ！愛しのめだかちゃん！！おかえりー！！！」

ダイビングヘッド！！！！

誰??? っと思うまもなく・・・

「ふんッ!!」

ドカンッ!!

めだかちゃんの右フックが直撃!!

アレ痛いんだよなあ・・・

っと思うてたら・・・

僕の方に飛んできた。

って!

「えええ!!」「わあああ!!」

ドッガラッ! ガッシャーン!

纏れ合いながら倒れる・・・

とりあえず・・・



黒神ローリングソバット炸裂！！

メキヨ！！！！

屋敷にめり込んだじゃった・・・

「行くぞ！！」

「う・・・うん・・・」

「めだかちゃん怖い・・・」

何事も無かったように　めだかは奥へと・・・

執事さんや家政婦さん達は微笑んでるだけ・・・

これって恒例行事？なの？

驚きながらも・・・

まるで迷路のような屋敷の中を案内されめだかちゃんの部屋へと向かった。

あの人だいじょうぶかなあ・・・

案内の途中・・・ちらちら後ろを見ていたのに気がついたのか

「どうかしたか？」

めだかが足を止め聞いてきた。

「い・・・いや あの人大丈夫かなってさ。」

嘘じゃないよ？

だって 家にめり込んでたもん。

心配するじゃん普通。

「心配するな！」

あれ・・・？

「いつもの事だ。」

「いつもなんだ・・・ あの人？」

とりあえず・・・いつもの事というのは置いて・・・

いいのかな？

「ああ、変態<sup>あれ</sup>はお兄様だ。毎日毎日抱きついてきそうなのでな、あ  
あでもない<sup>あれ</sup>と止まらないんだ。」

さも当然のように言い切るめだかちゃん。

「へえ・・・お兄さんなんだ・・・ 変わってるって言っかなんと  
言うか・・・」

「めだかちゃんのお兄ちゃんか」 なら 大丈夫だね！」

横で聞いていた善吉は笑顔になった。

何がなら大丈夫なんだろう？

まあ・・・いいや。

「うむ 私もほとほと困っておるのだ。」

めだかは笑っていた。

（本当にいつもの通りなんだね・・・）

その様子に苦笑いするしかなかった。

第12箱 「わあ——!!……誰?」 (後書き)

ありがとうございました!!

第13箱 「なんかよくわかんねーが、不幸へいいもの」もってんだな？」（前

よろしく願いします!!

第13箱 「なんかよくわかんねーが、不幸へいいもの」もってんだな？」

さあー トランプ勝負だあー・・・

「よし！では もう一度だ！！」

「うん・・・」

さて 時を少しさかのぼろう・・・

・・・

・・・

めだかちゃんのひろーいお家のひろーいお部屋でとりあえず、善吉が「トランプしたーい」といったので、

始まりましたのはトランプ対決。

もちろん、めだかちゃんは僕を標的にした・・・

「うつう・・・ 2人とも強すぎだよう・・・」

負けてばかりの善吉は涙目になっていたが・・・

めだかは相変わらず・・・

「流石 劉一だ!」

の一言。

ちょっと休憩したいなあ・・・

「あ・・・めだかちゃん!! 僕トイレ行きたいんだけど!!」

苦し紛れっぽかったけど・・・

「む・・・? 仕方あるまい、ならば一時休戦だ。」

とりあえず 見逃してくれた 苦笑

「ありがとー! じゃあ 行ってくるね?」

「うむ。ところで、《ボタンツ》・・・」

行ってしまった。

「劉一はトイレの場所はわかっておるのか? まあ あ奴なら 大丈夫だろう!」

「めだかちゃん! 僕と勝負!!」

善吉がそう言った。

「よし! かかってくるがいい! 善吉、私は誰からの挑戦もつける!」

凜ッ！

劉一がいなくなった為、

めだか VS 善吉

カードバトル大会がスタートした。

「困った・・・ トイレの場所はわかったけど・・・ 広すぎだよ、この家・・・ どこだったっけ？めだかちゃんの部屋・・・」

とぼとぼ歩いているのは劉一くん。

どうやら道？に迷ったようだ。

そこまで広いのね・・・ココ。

「うっ・・・ん とりあえず、こういう迷路に迷ったときは左手法で・・・ ちょっと効率悪いか。 はぁ・・・しかたない 片っ端から部屋をあけていこう！もし 家の人に会えれば事情を話して案内してもらえばいいんだし！」

よし！空元気だぁ！！

はぁ・・・

一部屋一部屋開けては訪ね開けては訪ね・・・

中々人の気配がしないな・・・

「家は広いんだけど・・・あんまり人がいないんだね・・・」  
「どこか・・・このまま見つからなかったら・・・」

そう僕は心配していた・・・

「めだかちゃんに怒られそうだ・・・」  
「遅いぞ!! どれだけ勝負を待たせる!!」  
「つか言って・・・」

そうそつちをね・・・

帰るのは時間がかかっても構わないけど、めだかちゃんはそうもい  
かないからなあ・・・

勝負数を倍にする! ツとかいいそうだ・・・

ゾワッ・・・

「それはきつい・・・早くしよう・・・」

劉一は歩く速度を上げた。

そして調べに調べぬいた15部屋目!!

多ッ!

ってツッコムのはやめます・・・

何やら・・・薄気味悪い部屋だった・・・

異常に暗くて・・・そして　あたりは本で埋め尽くされてて・・・

人の気配はする・・・

呻き声みたいな感じが不気味だけど。

「あー・・・すみませーん・・・」

恐る恐る奥へと入っていった。

声が・・・する方へと向かって。

そこには机があり、そのみが明るくなっていた。

机もちろん本で埋め尽くされてるかのように積み上げられ、

そこで勉強をしている人がいた。

勉強っていつかどうかわからない・・・

自分自身を鎖で縛り上げていた・・・

「あ・・・あー」

声を掛けたその時、

「くそっ！！恵まれた生まれ！恵まれた養子！恵まれた才能！恵まれた環境！どれもこれもクソ喰らえだ！」

そう言いまわりの本・文具を辺りに投げつける！

「もつと！もつと！！不幸を！地獄を！！もつと！！！！」

狂ったかのように叫び続ける・・・

その所為か、頭上から降ってくる物に気がつかなかった・・・

「あ！危ない！！」

咄嗟に劉一は彼女を押し倒し庇う。

ドガア！！バサバサバサ・・・

降ってきた物、それは重量感がたつぷりとある百貨辞典のような本数冊だった。

とりあえず本棚そのものが倒れてこない事には喜んでおこう・・・

「あたた・・・だ・・・だいじょーぶ？」

緊急事態とはいっても女の口を押し倒している事には変わらないから、

ちょっと悪そうに言った。

「！！誰だ？お前・・・？」

女の口は驚きながらこっちを見た。

「あ！ゴメンね？押し倒しちゃって、すぐに退くから・・・」

そう言うのと、体を起こし彼女を引っ張りあげた。

「ふう・・・改めて大丈夫だった？君・・・」

心配そうに言う・・・

「勝手な事しやがって・・・ ほつといってくればよかったんだ！私のもつともつと地獄を見なきゃならねえんだ！こんなもんなんでもねえ！」

そう言つて、机に戻った。

「・・・君はなんでそんなに自分を追い込んでいるの？」

劉一は助けた事を罵倒された理由より、そつちを聞いてみたかったみたいだ。

「・・・<sup>テメー</sup>幸せ者みたいな奴に言っても理解されないかもしれねえがな、素晴らしいものつてやつは地獄からしか生まれないんだ！それ

は歴史が証明してる！こんな恵まれた人生じゃ私は駄目になるんだよ！だからだ！」

歴史上の多くの天才達は不遇を送っていて偉大な発見は大抵劣等感から生まれている。

それは間違いないのかもしれない・・・

「なるほど・・・確かにそうかもしれないね・・・」

しっかりと彼女を見つめながらそう言った。

「はっ！わかんのか？　ならもうジャマするんじゃないねえ！」

そう言い机に向かった。

「でもね・・・それは少し違うと思うんだ。机に向かったままの姿勢でいいから　僕の独り言聞いてくれるかな？」

机に向かったままの彼女に言う。

「確かに・・・偉大な発明や発見は・・・そう言う劣等感からとか、不幸とかから生まれてきてるのかもしれないね・・・　けどね。それは糧であって、最終的には努力が実を結ぶんだと思う・・・　そこは地獄だとか幸福だとか関係ないと思う。だって・・・この世にはたくさんの方が劣等感や不幸を背負ってるんだから・・・　君の言い方だったら・・・この世に天才が沢山生まれちゃうと思うよ？それだけでひとくくりしちゃうたらさ。」

そう続けていくと・・・

彼女の指が止まっていた。

「どんな不幸からもうい上がる努力、どんな幸福な人生を送っていたって、それに満足せず・・・慢心せず・・・努力を積み重ねる事・・・それがすべてに繋がるんじゃないかな？」

そして彼女がこっちを見た。

「てめーの言葉・・・口だけじゃねえな・・・なんかわかんねえが真に來る感じだ。不幸いいものを持つてんだな？」

彼女は初めて笑った。

それと羨ましそうな目をしていたなあ・・・

「ふふ・・・そうだね・・・僕も不幸を持つて・・・でもね、救われたんだ。そこから、だから生きていられるし、毎日楽しいこと*スティック*でいっぱいだよ。禁欲な君にとっては要らない物って思っただけど。」

そう言つて上を向いた。

「んで？なんで私と話してんだ？なんで私に構うんだ？お前は、自分の主張を聞いてもらえる奴がいないのか？」

救われたといつてもまだ不幸いいものもつてる感じがするためか　笑いながら話していた。

「そんなこと無いさ、僕はめだかちゃんと遊んでいたんだけど、ト

イレに行つてたら帰りがわからなくなつて……でココについたつて感じたよ。君に話したのは唯のおせっかいさ。（僕……記憶力いいと思つてたけど……そうでもなかったんだね……苦笑）」

劉一も笑いながら話した。

「妹と……？ああ んじゃ お前が劉一って奴か？ 毎日のように妹がめだかいつてた奴だな。」

「何を言つてたかは……聞かないけど……劉一であつてるよ。よろしくね。君のはめだかちゃんのお姉さんなんだね。名前は？」

今度は苦笑しながら話していた。

（あの化け物じみた妹めだかの上に行く男だったな……確か、ちよつとばかり興味が湧くな……）

「??」

なにやらじつくり見られているけどなんだろう？

「私はくじらだ。 お前がおせっかいなのはわかったが、そのついでに、私を説得でもしよーってか？ 生憎幸せになるくらいなら死んだ方がマシッって考えたからな、それは無駄だぜ！」

そう言い手を振った。

「いいや、説得するつもりなんて無いよ。」

「そうか、なら良かった。」

そう言つて再び机に向いた。

「でもね・・・死んじゃあだめだよ。それこそ何も生まないし何も残らない・・・残るのは残された者に残る悲しみだけ・・・この世には生きたかつたのに生きられなかつた人がたくさんいるんだ・・・自分からそれを絶つような事はしちゃだめだよ。・・・でも・・・僕がいつでも説得力ないかな・・・僕は・・・んだんだし・・・」

隣に立つ。最後の方は聞えないほど・・・声が小さかつた。

「はっ！余計なお世話だ！」

そう言い唯ひたすら勉強を続けていた。

「あ！これ・・・確かジユグラ―定理だね？」

一枚の紙を取つた。

「ああそうだ、数学界での難問だよ最大のな。」

こちらを向かず唯淡々と説明をした。

しかし、くじらがこんなに話す相手なんて兄妹でもいなかったのに・・・

（なんだろうな、こいつと話してると不思議と楽になんだわ。不幸いいものをもつてる奴と話しているからか？わかんねえな・・・）

自分の変化を自分自身で観察していたら、

横にいる男が何やら呟いていた。

「……定理から、 $n > q > 2n$ 」となるような素数  $q$  が存在する……つまり任意の自然数  $n$  について  $n$  より大きく  $2n$  より小さな素数が必ず存在する ことが証明されており、 $x$  は必ず存在することになる。よってこのような数の組は存在しない……か……」

そう言い紙に纏めていった。

「ふう…… まあこんなところかな？」

解いた紙を机の上に置き、

ぐつと背伸びをして、更に欠伸を1つ！

「さつきから何をつぶやいてたんだ？」

くじらが不思議に聞いていた。

「いや！何でもないよ。たd「劉ーイイ！！！」」

ビクッ！！

恐る恐る振り返ってみると……

後ろに立っていたのは阿修羅のようなめだかつた……（汗ッ！）

「え．．．っと どうしたの？？」

「……まっ……たの……」

???

顔を俯かせて何やらプルプル震えている。

「ずっと待ってあったのだ!! いつまでたっても戻ってこないのはなぜだ!!」

泣き顔のように抱きついてきた！

抱きつくというか……壁に押さえつけられてる？

「う……うめっ……!!」

「ココ広すぎて……」

迷ったんだよ……」

苦しい・・・

「なら何故！くじ姉と仲良く遊んでおるのだ！？ 今日私は私と遊ぶ約束であろう！！！」

更にヒートアップ！！！！

「いたたたた!! くじらさん!! 何とか言つてよお!!」

くじらにヘルプを求めただけど……

「こいつ・・・最難問の定理をこんなに速く・・・ブツブツ  
ツ・・・」

何やら呟いていて全く弁護してくれない・・・

「さあ！...どついうわけだ！！？」

めだかちゃんの力が更に入る！

「わあー！...ごめんごめん！」

とりあえず謝り倒した。

というより・・・いつもより力強くないかな・・・？

骨がミシミシいつてるよー・・・

第13箱 「なんかよくわかんねーが、不幸へいいもの」もってんだな？」（後

めだかちゃんの リユウイチくんに対する執念は凄いですねえ」

苦笑

善吉君はまだ小さい（みんなもだけど）から嫉妬なんてしないと思うけど・・・どうだろう・・・

では！ありがとうございました！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8354x/>

---

めだかボックス ~From despair to hope ~

2011年11月18日19時22分発行